

か、と思へばそんな氣配もない。空模様が次第に怪しくなつて、そろ／＼生温るい西北の風が頬を撫で出す。體中倦くなつて氣が重くなる。天が益々濁る。と、何處からとも知れず、灰神樂が揚つたやうに埃が立つて来て、床の上も、縁先も、臺所も、箆筒も、机も、本棚も、家中どこもかしこも、幾ら拭かうと拂はうと、瞬く間にまた元通りに積つて、仕舞にはたうとう窓硝子まで指先で字が書けるやうになり、戸外は戸外で、ちやうど火山でも破裂した時のやうな粉見たいな沙が、一面に霧でも掛けたかと思ふほどに降つてゐて、目といはず、鼻といはず、耳といはず、凡そ明いたところへは容赦なく入るので、口を動かす度にヂャリ／＼と可厭な音がし、肌を觸つて看ると、何所もザラ／＼して氣持が悪い。かうなると、たゞもう文字通りの紅塵萬丈で、陽は有れども姿を消して無きに均しく、天地晦冥、遠見は丸で利かず、頭腦がぼんやりして何事を仕ようにも退儀で氣が進まず。それに軋もすると、蟻子 *Man-za* とか白蛉兒 *Pai-ling erh.* とかいつ、内地の蚋に似た目にも留まらぬ微い毒蟲が風のまにまに無數に寄つて來ることがあつて、うつかりすれば血みどろに螫されまいものでもなく、螫されたが最後、十に八九は死を免かれぬ、といふ世にも怖ろしい惡病に取憑かれる懸念がある、とあつて、紗で張つた帳に包まつたなりちつと寝轉んで、ひたすら天候の回復を待つのはない。

偶逆か内地に起る旋風ですら、家の二三軒は造作もなく吹き上げて、遙か彼方の大地へ木葉微塵と

叩き付けるくらゐであるから、増してや太平洋上までも塵雲を漂はす蒙古風の猛威の程は、所詮われ／＼の想像だに及ばぬものがあらう。その渦動の中心に間近いところでは、山河湖泊の別なく、低きも高きも押並べて一様に覆ひ悉くし、そこに育まれる人畜、そこに積まれる貨財、否、この世に有りと有らゆる物皆は、その在るが儘の姿をそれなりに没し去り、雙眸たゞ黄沙の天際につゞくを見るばかり。吐魯蕃の南へ往くと、半ば埋み残した死の都がそこ／＼に在つて、その伽藍堂のやうに空洞となつた建物の内に、人や、羊や、犬が在りし昔をさながら、土偶のやうに立つてゐるのを探險者は目撃するといふことであるが、それはひとりタリム盆地だけの話ではない。湖北の漠原にも幾許の民族が興亡の歴史を繰返したか知れぬが、今や蒼茫としてその跡を弔ふに由なく、人の戀ひ、争ひ、悶えの一切は更にも言はず、曾つて繁殖した古生代の動植物の群落すらも、その生存状態をそのまゝ沙場下に深く秘めて、永劫の寂滅に歸つて横たはつてゐるのである。

歐亞 *Eurasia.* の山野は、そのむかし到る所として鬱葱たる大森林に蔽はれてゐた。北支那から滿蒙を経て西伯利に連なる一帯の地方も無論さうであつた。それが何んで今日のやうに丸裸になつて了つたかといふと、一は火耕の弊であり、一は黄沙の害である。人類の繁殖につれ無闇矢鱈と密林に火入れをして、片端から惜し氣もなく白田にして了ふのは、勿體ないといへば勿體ない話であるが、そ

れも詰まりは春に腹は代へられぬ萬餘儀ない成行であるとして、西北の烈風に煽られる儘に移動する
 黃沙の侵蝕ほど、世にも怖ろしいものは又とあるまい。その影響は何よりも先づ樹木に現はれる。乾
 燥に對して一番抵抗の弱い松柏の類は最先に立枯れ、檜、榧、胡桃などがこれに次ぎ、それから樺、
 榆といふ順序にその後を追ひ、楊柳の屬だけがどうやら最後まで残る、と學者は説く。露も宿せば雨
 も呼ぶ、翠縁のこんもりした樹蔭があればこそ、青々とした下草も萌ゆれ、かうどうも見晴かす涯み
 だん／＼素裸にされて了つては、いづれ早晚不毛の荒漠と化してゆくことは知れ切つた話で、大漠の
 區域が追々擴張し、現に滿洲では興安、奉天、熱河諸省の西北境を掠めて嫩江——遼河の線まで押寄
 せ、北支那では長城を踰えて河北、山西、陝西、甘肅四省の邊境を侵蝕しつゝある状態から推せば、
 その西北半が塞外と同様の運命に陥るのもたゞ歲月の問題と言つて可からう。(北支那西北境の沙漠化
 はサワビイ、クラーク兩氏の共著「陝甘を經つ」A. d. C. Sowerby & R. S. Clark "Through Shan
 Kan."を一讀すれば思ひ半ばに過ぎるものがあらう。)かうなつて來ると、人力の到底いかんとも仕
 難い自然の成行に任して、只様傍觀の態度に出て怪しまぬ土民の氣持も、一應無理のない次第と思は
 れぬではない。

熱帯低氣壓の發生は謂はゆる颱風 Typhoon. となつて襲來する。颱風は字書に見えぬ新しい作字

であるが、もと大風 Tai-feng (北京正音) の地方訛であるらしい。清の林讓光の臺灣紀略には「秋令
 颱風時起。土人謂。正二三四月起者爲颶。五六七八月起者爲颶。颶甚於颶。而颶急於颶。」とあ
 るけれども、これは聊か眉唾物で、餘り引當にはならない。また辭源には「今謂颶爲驟發即止者」
 颶爲連數日夜始止者」ともあるが、要するに兩者の間には本質的差異はない譯で、強ひて區別す
 るにも及ばぬやうである。

熱帯低氣壓發生の原因に就いては、今日までのところローデワルド Rodewald 氏等の三氣塊説と、
 堀口博士の主副兩颱風説とが對立してゐて歸一を看ないやうであるが、爰には暫らく、大陸方面に發
 生する溫帯低氣壓のやうに明瞭な不連續線の存在を認め得ない點に於いて、熱帯低氣壓は前者とその
 起因と構造とを異にするとの説に従つておく。惟ふに颱風の西進と、北東への轉位と、若返りなどの
 解説は、向後の研究に待つ他のないであらう。颱風は誰もが知る通り我が南洋諸島の間に發生し、
 その當初こそ極めて微弱で、單に氣壓が幾らか低く、雷雨を伴つてゐる程度に止まるけれども、東か
 らの大循環氣流に押されて、西方へ移動を始めるにつれ遽に勢を加へ、小笠原や臺灣や比律賓などに
 近づく頃には、風力も雨量も共に激増するのが常例で、やがて太平洋の動原高氣壓の爲に北東に進路
 を變へて拋物線 Parabola を描き、中支那から我が東方海上に至る範圍を掠めて、遙か北太平洋上へと

消え失せるのを定型とする。當面の問題として茲に取扱はるべき、支那に襲來する颱風には、この定型の外に、發生地點から西方に移動したまゝ、依然その進路を變へずに比律賓を掠めて直に南支那を指す異型がある。

颱風は夏から秋のもので、縦しや冬に起ることがあつても、大した發達を見ないうちに、潰れて了ふのが通り相場のやうになつてゐる。堀口博士の研究によると、「颱風圈内に於けるエネルギー Energy」は(一)暖かい空氣が下層に流れ込み、それが颱風の中で冷却し、上層から寒い空氣となつて流れ出ることにより與へられる熱量と、(二)圈内で水蒸氣が凝結する際に放散する潜熱とがその主なもので、それに(三)外部から流れ込む風のする仕事と、(四)圈内で摩擦の爲に生ずる熱量とが幾分加はつてゐる」とあるから、たゞさへ緯度の高い地方では、勢ひ衰退を免かれぬのに搗て、加へて、氣候がだん／＼進むに於いては猶更のことで、さてこそ前のやうな通り相場も生まれだ道理かと領付かれる。しかし低緯度の地方は一概にさうとばかりも斷ぜられない。尤も支那へ襲來する颱風とても、一年の後半期——殊に七月乃至十月の四ヶ月間に於いてするものが多いには違ひないが、さりとて後半期の末から翌年の前半期にかけての冬季に於いてし、而かも相當の猛威を振ふことも決して珍らしからぬのである。即ち熱帯低氣壓のうち一年の前半期——といふ中にも取別け一月以降四月に至る間に

發生するものは、前記の異型に屬して、概ね南支那を指して直往する場合が多く、また後半期に發生するものは、定型に屬して、臺灣附近からその進路を東北に取つて屈折し、孤狀を成して山東半島から黄海方面へと通過する傾向があり、その屈折點に於いて風力、雨量共に強烈を極めるもの、やうである。

今一九〇四年乃至一九三四年の三十年間に於いて、浙江省温州を分界として、以北で揚陸した颱風と、以南で揚陸した颱風との月別表によると——

(温州以南)

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
×	×	×	×	×	六	四〇	三三	三〇	五	一	×	二七

(温州以北)

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計	
×	×	×	×	×	×	四	一三	五	×	×	×	三三	
計	三	五	九	一〇	三〇	四三	一三五	一六二	一四七	一六	三	四〇	六二

(颱風發生總數)

で、支那沿岸を襲つたものは總じて百三十八回を數へ、その内温州以北に揚陸したものは僅々二十一回に止まり、残りの百十七回は以南に揚陸したもので、而も別の統計によれば、廣東附近に揚陸して、そのまゝ北西へ進行するものが多いやうである。(一八九三年——一九二四年間に於ける颱風の發生進路及進路別の回数表) 大雑把な所、支那の颱風は定型が少く、異型が遙に多く、兩者共に夏から秋にかけて頻到するには違ひないが、さりとて冬季にも穴勝稀有でないといふに歸する。

その昔、留學生として唐に留到の我が阿部仲磨は、勝實中藤原清河が遣使として渡航したのを機會に、携同して歸朝せんとして明州(今の浙江省鄞縣即ち甯波)から乗船したが、途中暴風に逢ひ安南に漂泊したといひ、また彼の南宋最後の哀史を綴る祥興二年二月、每戰悉く利を失ひて萬策盡きた末、張世傑が厓山から海に航して安南に趨かんとして、平章山下(廣東省新會縣南海中)に至り、颶風大に作り舟遂に覆つて世傑は溺れ、宋此に亡ぶといふが、それらはいづれも異型の低氣壓に遭遇したもので、轉じて英文壇の鬼才テオドル・ヨセフ・コンラード Teodor Josef Conrad. の小説タイフーン "Typhoon" は、彼が東洋航路の一汽船長として福州へ航行の途中、臺灣海峡に差懸つて偶出會した、貴重な體驗を題材として描寫したもので、小説としての價値を除外しても猶且つ、われ／＼に取つて興味津津たるものがあるのを覺えるが、これは疑ひもなく定型の颱風との惡闘を取扱つたに他な

らなから。彼の乗船南山號が最も難航を極めた位置は恐らく、颱風の屈折點近くでもあつたであらう。更に憶ひ起せば大正三年九月八日、山東は百年來といふ大荒れに見舞はれ、龍口埠頭の棧橋は悉く洗ひ去られてその用を成さず、漂木堆く岸を埋め、街上は倒屋算なく、否らざるものも侵水床に達し、慘狀眞に名狀し難いものがあり。爲に折柄待機中の我が青島攻圍軍の揚陸を、一兩日延期するの止むなきに至つたのであつたが、これも前者と同じ型の低氣壓の仕業であつた。ずつと降つて、近年では民國十一年(一九二二年)八月二日に汕頭附近を襲つたものが最も猛烈で、七千人の死者と二億圓以上の損害を齎らしたと傳へられる。

支那へ襲來の回数是一年平均二十乃至三十回で、そのうち揚陸したものは四五回に止まり、發生の回数に比べて割合に少いやうなものゝ、風速四十米以上にも及ぶ室戸颱風も顔負けするやうなのが稀有でなく、光緒二十七年(一九〇一年)八月一日香港での觀測は最大風速實に六十米八を算したとのことで、南支那の沿岸地方では夏場から秋先になると、我が二百十日や二百二十日にも増して、農民や漁夫や船乗りの間に怖がられてゐること尋常でない。しかし奥地へゆくに伴れてその勢力は漸く衰え、大綱みなところ、北京から央ごろ宜昌を経て佛領印度の老開に至る線以西には、幾んど影響を及ぼさないやうである。

以上の外に、揚子江流域を經過する温帯低氣壓と、支那では四季を通じて一番風當りが強いといはれる福建沿岸に、盛夏の候屢々流行する地方風とがある。遼齋問覽に「閩中泉(州)福(州)興化三州の瀕海は、毎歲七八月に東北風多し。俗に癡風 Chih-Feng. と號す」とあるのは後者を指したもので、一種の逆低氣壓と解せられる。

二

支那では季節風の發達が著しいことは既述の通りであるが、降雨その他に多大の關係があるのは、寧ろこれらの温帯低氣壓と熱帯低氣壓の通過であつて、南東季節風の影響にも増して大きな役割を演じてゐる。一九一一年乃至一九三二年の二十一年間に、揚子江の氾濫が五十六回記録されてゐるうち、九回は颱風に基因するといふのを以つて看ても、その一端が推して知れよう。地的環境の項にも述べた通り、支那の氣象は兎角片寄り勝ちで、降る段には明けても暮れても引切なしに大雨が降りつゞけ、その揚句江河が氾濫して慘害を齎らすかと思へば、一旦降らぬとなつたが最後、それを月餘に亘つて雀の涙ほども降らないので、輒もすれば旱魃の懼れを免かれ得ないが、支那の二大災厄といはれるこの恐るべき水旱害も、その由つて來る所は畢竟、季節風の交代と低氣壓の通過との影響に他

ならぬ。

漢民族が最初定住した謂はゆる中原の壤土は、泰西のライン Rhine. その他の大河々孟の堆積土と同様の黄土 Loess. と信ぜられるもので、カルシューム性沙質壤土に屬し、岩石の分解に成るものではなく、實はその崩壞に因る微粒から成つてゐて、軽くて手觸りが粗い上に脆くて壞れ易く、粘り氣としては更にないのをその特徴とする。この特徴は恐らく膠狀の粘土を含まない所爲でがなあらうけれど、その代り石灰分に可也富んでゐるやうであるから、北支のやうな乾燥勝な地方では存外堅く固まるものらしい。しかし水には至つて侵蝕を被り易いので、大雨が降ればその流れた跡は忽ち割れて窪みとなり、かくて一旦出來上つた窪みは次々に降る雨水の爲にだん／＼割りに割られて、たうとう仕舞には深い一條の溝となる。兩側が壁よろしく屹立つて、見上げるばかりに高い切通しのやうな崖道や、地割れがしたやうに陥ち込んで、見下せば脚が竦みさうな遙か底の方を、チヨロ／＼水が流れてゐる洞溝 Canon. などが、そこ／＼に目撃されるのは黄土層に特有の地形であるが、そは要するに、さうした侵蝕作用が長い年月に亘つて反覆された結果でなくして何んであらう。彼の史上に名高い函谷關や潼關の險なども、詰まりはこの地形を巧に利用したに過ぎない。また黄土層は岩石を雜へないので掘鑿に便であり、脆弱な割りに崩壞の虞れがないところから、土民がそこの崖縁りに洞窟を穿

つて、穴居生活を営んでゐることは周知の通りであるが、穴居生活といへばいかにも野蠻染みて、現代放れがしてゐるやうに聞えるけれども、その實は穴勝ちさうばかりではなく、取分け上流人士の弟宅などは磚(煉瓦)積みの堂々たるもので、寧ろ土地柄に相應しい文化生活と言ふべきである。

餘談は擱き、支那の黄土に關する研究は、千八百六十年に獨逸政府から派遣され、二ヶ年餘の間各地を遍歴して親しく調査を遂げた、フェルデナンド・フライヘル・ウオン・リヒツトホーヘン教授 *Erhard Freiherr von Lichthoven* の報告書を至上無二の權威資料と仰ぎ、今だにその請賣りでお茶を濁してゐる程度に止まるものゝやうである。黄土は東の方河北に起つて西の方甘肅に及び、北は蒙古の漠原に接する地方から、南は揚子江に近い地方にまでも分布し、就中陝西の渭水流域から河南地方にかけてが最も豊富で、その特質は周圍が炭酸石灰質の外皮に包まれ、微粒毎に管狀の細孔を有し、その細孔は概ね垂直に連つてゐて、宛ながら海綿のやうに水分を吸収して好く浸透せしめるに在る。要點だけを掻い摘んで言へば、先づ雜つとかうで、黄土は何分腐植質に乏しいので元來餘り肥沃な方ではないが、雨が降りさへすれば一種の毛管現象が起つて、黄土層(數吋乃至數百呎)の底に溜まつてゐる、無機物などの養分に富む地下水を表土まで吸ひ揚げる作用をする。それゆゑ碌々肥料を呉れぬでも、農業が營まれる道理である、と一般に説明されてゐる根據はどうやらそこから來てゐるらしい。

い。けれども、一方に於いて最近次のやうな新説を唱へる學者もあることを、考慮の中へ加へて然るべきであらう。

東京農業大學教授住江金之博士は、昭和十五年七月一日の東朝「學界餘滴」に北支の土と題して曰ふ――

「北支の土を分析して見ると、日本邊りに比べて瘠せてゐるに拘らず、殆んど肥料らしい肥料はやらすに、黃帝以來四千年も作物を栽培して、然かも地力が減退しない。これには何か譯があるだらう、とは度々聞かれる所である。専門的の立場から見ると、これに對して二三の理由もあるが、その中で今まで誰も氣注いてゐなかつたことに、アゾトバクター *Azotobacter*(窒素菌)の問題がある。自分は一昨年冬行つた時、各地から畑の土、川床の土、荒地の土など採つて來て、その後微菌の調査をして見ると、驚いたことには、空氣中の窒素を食つて肥料分を造つて呉れる、アゾトバクターといふ有益な微菌が、到るところに百パーセント棲息して盛んに地力恢復をやつてゐる。無肥料連作可能の原因の中で最も大きなものゝ一として、目に見えない此の微菌の力を擧げることが出来る。」

と、これなどは近頃傾聴に値ひする意見であると思はれるが、それに就けても、黄土層の成因や分布

や性質などに對しては、詳細に涉つて更に再調査の必要があるではあるまいか。

どんな土地でも、作物の豊凶が一に雨量の多寡に係はることはいふまでもないが、取分け以上のやうな特質を有する黄土層に在つては猶更の話で、諺にも五雨十風とある通り、頃合ひのお濕りが有ると無いとが、いかばかりそこに定住して農業生活に乗り出した漢民族の、重大問題であつたかは、蓋し想像に餘りあるであらう。有史以前の洪水や旱魃の傳説と、これに關聯した堯や禹の神話、さては洪範九疇に「庶徵以つて變を察す」とあるなどは、明かにこの事を裏書するに足るものでなければならぬ。庶徵（雨、暘、寒、燠、風、時）以つて變を察するとあるのは、雨風や寒暑が時を得て度に適ふか否かで、天の咎があるかないかを判するといふことであり、洪水や旱魃の傳説に就いては、學者により次のやうに解釋されてゐる。

先づ最初に注目されるのは、楚辭の天問篇に「羿**いづくんぞ**日を射る。鳥**いづくんぞ**羽を解く。」とある一句であるが、これは淮南子に「堯の時に、十日並び出でて、草木皆な焦れ枯る。堯、羿（弓の名人）に命じ、仰いで十日を射さしむ。その九鳥（日の中には古く鳥が居ると信ぜられる。鳥は黒點を指す。）皆な死し羽翼を墮す。」とあり、莊子にも「十日並び出でて萬物皆な照る。」とあるのと照らし合せると、結局氣象上に謂ふ所の幻日 Parhelion = Sun-dog の顯象に託して、旱魃の事實を物語

つたものと推せられる。幻日とは二つの暈 Halo の交叉によつて、太陽の周圍に生ずる太陽と同じやうに照り耀く幾つかの光輪を指すので、嚴しい照りがつゞくと、時折大陸の奥地に見られる現象に他ならないが、堯の世にも偶それが起つて人民の苦しみは尋常ではなかつた。そこで堯は弓の名人に命じて十日を射させ、そのうちの九つの日に射當て、九つの鳥を殺したので、天には永へに一つの太陽しかなくなり、安泰な生活が送られるやうになつた。人民の悦びは一方ではなく、堯を戴いて天子とした。これが旱魃傳説の要領である。また洪水傳説は幾多の經典に載つてゐる著聞なもので、書經の堯典や益稷篇や史記などによると、水を治める爲に登用された禹は、身を勞し思を焦がし、外に居ること十三年、家門を過ぐれども入らず、陸行には車に乗り、水行には船に乗り、泥行には楫に乗り、山行には簾に乗り、九州を開き、九道を通じ、九澤に跛し、九山を渡り、多くの川を導いて海に流れるやうにしたり、堤を築いて水を防いだり、有りと有らゆる努力を傾けて水を治め、民に食を與へることに成功した。そこで舜はその業績を嘉して政治萬端を委任し、崩するに迫んで禹が天子の位を踐んだとある。

さて、この二大災厄の過去の記録はどうかといふと、早稻田大學の出石誠彦教授の研究によれば―前漢（西紀前二世紀）の初から唐の時代（九世紀末乃至十世紀初）までの間に、旱魃が三百三十五

回、洪水が三百四十二回で都合六百七十七回、その内譯單に「何年春旱」とあるもの十二回、一月、二月、三月とあるものを合せて六十六回、同じく夏とあるもの三十七回、外に四月の四十四回、五月の四十三回、六月の二十九回を合せて計百五十三回の多きを算し、これに對して秋は六十二回、また冬は僅に二十二回で、外に季節不明のもの三十二回となつてゐる。して看れば、旱魃は幾んど一年の前半期といふうちにも、取分け陰曆の四、五、六、三ヶ月に起る場合が多く、洪水はその總數三百四十二回のうち季節不明の二十二回を除き、春の一、二、三月計二十六回、冬の十、十一、十二月計十九回に反し、夏の四、五、六、三ヶ月の計百三十六回、秋の七、八、九、三ヶ月の計百三十九回で、五、六、七の三ヶ月分丈で總數の過半を占める勘定となり、結局農民に取つて一番大切な期間に、二大災厄が交々襲ひ掛かつて來る道理である。

遠い過去の記録はそれとして、最近の状態を見ると、昭和三年（西紀一九二八年）には山東、河南、山西、陝西、甘肅、綏遠、察哈爾の八省に亘り大旱が起り、その區域は實に五百三十五縣に及び、罹災民三千萬口の多きに達し、數千萬人の餓死を出したと報ぜられ、翌四年（一九二九年）には陝西に前年に引續き旱害があり、他方河北は水害を被り、踰えて二年の昭和五年（一九三一年）には、揚子江から淮河を経て大運河に至る八十年來といふ大洪水があり、十六省五千萬人がその災害に罹り、二

十億元の損失を蒙つたと傳へられる。明くる六年（一九三二年）には六省百三十四縣に大旱害あり、蝗害がこれに伴つたかと思へば、他の十一省二百三十縣には大氾濫があり、引續き七年（一九三三年）には北支が大水に浸つて、十五省二百五十縣が災害を被り、八年（一九三四年）には更に十四省二百八十縣が同様の厄に遭ひ、十六省三百六十九縣が大旱に見舞はれ、九年（一九三五年）にはまた八省二百四十一縣に及ぶ水害があり、五千五百畝の耕野が濁流に洗はれ、二千萬口の罹災民を生じたといふのに、別に各地に旱害が起り、七千七百畝五千九百萬擔の糧食を失つたと傳へられる。十年（一九三六年）は近年珍らしい大豊作と唱はれたが、それでも地方によつては災厄を免かれなかつた。即ち同じ八月には黄河が決潰して徐州を中心とする一帯の地方に氾濫し、九百六十萬餘の農民が罹災し、そのうち百七十萬口が離散して濟南附近に流れ込み、七月には四川が大旱に見舞はれて百二十二縣三千萬の罹災者を出してゐる。十一年（一九三七年）には河北が氾濫して耕地の二割五分が水浸しとなり、延いて山東の一角に及び、八百萬の罹災者を生じた。翌十二年（一九三八年）は則ち事變勃發の年で、蔣介石軍が我軍の進撃を阻止する目的を以つて、中牟といふ地點に於いて黄河を決潰せしめた爲め、謂はゆる黄河を生じ、開封の南東二三十里の太康附近に於いてその河幅は實に六里に達し、高さ二米半の太康城壁は五寸許を残して、全城悉く濁流の中に没し去り、新黄河一帯の沃野百萬

町歩は爲に水浸しとなつたといはれ、翌々十三年（一九三九年）は北支は一般に六月まで日照りつきで、折角蒔いた種子も芽を出したまゝ立ち枯れるといふ始末であつたが、その後打つて變つた土砂降りで、七、八の兩月にかけて永定河その他の河川が氾濫して三百萬町歩の田畑は水浸しとなり、白河の堤防が決潰して天津街上も遂に濁流に吞まれ、爲に附近一帯が食糧難に陥つたことは、今だに世人の記憶に新たな所であらう。

北支には水害は五年に一回、旱害は三年に一回、といふ諺があるらしいけれども、最近はどうしてそれどころの話ではなく、少くも一年置き、甚だしきは二三年打続けさまに、水早害のいづれかに見舞はれてゐる状態で、支那全體として看れば、いづれの地方かはこの二大災厄に罹らぬ年はないからぬものである。一口に二大災厄といつても、大陸支那のは、島國日本のはテンカラ較べ物にならぬほど大袈裟なもので、随つてその被害の程度も洵に言語に絶する。例へば、洪水にしろ、何んのことはない、潮が差すやうに何時何處からとも知れず、濁流が寄せて來るかと思ふうち、水嵩がおひ／＼増して田畠も、道路も、立木も、人家も、城壁も、一切合切だん／＼にその姿を消し、看る／＼當り一面の泥湖となつて了ひ、而かも何んとそれが小は我が四國、九州くらゐから、大は本土の倍三倍にも均しい廣さに擴がり、そのまゝ年を踰えても更に減水の容子だにないとは凄いではないか。また早

魃にしろ、連日焙鑪爐の焚口見たいな白熱の太陽が、目も眩むばかり照り輝いて天には一抹の雲翳だになく、大地は乾き切つて處々に陽裂れが出來、水流は落ちて河床を露はし、草木は立ち枯れ家畜はバタ／＼斃れる始末に、土民は忽ちその日の糧にも窮し、文字通り餓孚路に横たはり死屍に取着いてその肉を争ひ、山に一種の粉土を採つて纔に露命を繋ぐ、といふ世にも怖ろしい生地獄さながらの光景を呈する。

因に、一種の粉土とは、我が信越地方で「天狗の鼻汁」(天狗の麥飯とは全然別種)山形地方で「山糊」また北鮮の明川・吉州地方で「食土」と俗に呼ぶものと、恐らく同質であらうと推せられる。北鮮の食土 *Shik-tso* は咸北の明川と吉州との間の山奥に産する粉のやうな白土で、水氣を含むと膨れ上つて、心持ちぬら／＼した手觸りがする。土民の言によれば、むかしから救荒用の糧としたもので、水に溶いて食へば、無味淡白でちよいとばかり腹の足しにはなるが、少し過すと下腹が張つて便秘の虞があるとのこと。友人の標本で視ると、それは明にベントナイト *Bentonite* (膨潤土)の一種であつた。支那では昭和十年七月の大旱に因る飢饉の際に、土民達は觀音様のお恵みと稱へて觀音土 *Kuan-yin-tu* と名づけ、白い粉土を山から掘つて來て一時の凌ぎにしたと傳へられるが、宮島大八氏の説を又き聞した所によると、山西にも同様の風習があつて矢張り觀音土と呼んでゐるさうである。自

分は何も内地産や朝鮮産とこれらとの比較研究を遂げた譯ではないから、固より確言は出来ぬけれども、いづれも同質であるに相違なく、本草綱目に石麪 *Shih-mien* と見えるものに當るではないかとふ。それによると――

「石麪は常には生ぜず。亦瑞物なり。或は曰ふ、饑荒なれば則ちこれを生ずと。唐の玄宗の天寶三載、醴泉湧き出で、石化して麪と爲る。同じく憲宗の元和四年、石化して麪と爲る。宋の眞宗の祥符五年、石脂を生ず。麪の如し。(同じく)仁宗の嘉祐七年、麪を生ず。哲宗の元豐三年、石麪と化す。並に皆貧民取りて之を食ふ」とあるが、どうもテツキリそれらしい。

次に、餓孚路に横はつて死屍を食んだ例は、これ亦同じく四川大旱の際に於ける目撃談として、支那紙の報道によると、何某と名告る青年兄弟は老母を扶けて漂ひ歩くうち、老母はひもじさに得堪へず、そのまゝ路傍に斃れて了つた。すると、兄弟は相談の上、早速その肉を削いで當座を凌いだのであつたが、二人の言ひ草が振つてゐる、曰く、どうせ誰かに啖はれて了ふものなら、いつそ現在血を分けた俵に食はれた方が、本人も定めし本望であらうと。口實はどうあれ、生母の屍肉をすら敢へて辭せぬくらゐであるから、以つて一般を推して知るべしで、我が天明の飢饉を大規模にしたやうなの

が、支那にはちよい／＼見舞つて來るのである。

尙大旱には往々蝗害が伴ひ、温帯低氣壓が流行する春先から夏にかけて屢々雹害に襲はれることがある。降雹は概ね一局部に限られ、その被害も餘り廣い範圍に互る例はないやうであるが、その農作物に及ぼす影響は甚大で、土民の生業を脅威することは尋常でなく、餘り世人の注意を惹くに至らないのが實は不思議なくらゐである。次に蝗害は例のバル・バック女史 *Paul Buck* の小説「大地」『*The Good Earth*』を一讀して初めて知つたかのやうに、今更らしく驚異の眼子を瞪る向もあるらしいけれども、支那の經史にはちよい／＼見掛けるところで、別段珍らしがる程の事柄ではない。蝗は俗に飛蝗兒 *Fei-huang-erh* と呼ばれ、『*The chinese migratory locust (Pachytylus cinerascens)*』の別名を有つてはゐるけれども、我邦を始めとして、朝鮮、滿洲、蒙古の各地から印度、中央亞細亞、小亞細亞などを経て、遠く歐羅巴や阿弗利加までも廣く分布するダイメウバツタ又はトノサマバツタ (*Pachytylus danicus*, *Linnaeus*) と全然同種で、洋の東西を問はず、作物を食ひ荒らす害蟲の猛者として古くから知られてゐる。いづれの地方にも毎年一回は極まつて發生するのであるが、或る年殊に日照りつゞきの後などには、餘程好適な條件に恵まれるものか、夥しく異常の繁殖を見ることがあり。その大群を成して飛翔するに方つては、數里を隔て、羽音を聞くを得るくらゐで、一天忽ちその蟲陣に

蔽はれて白日爲に暗く、地上に降りてはそこに生える草といふ草、苗といふ苗を食ひ悉し、また他へ移つてそこを空うし、かくてその一過するところ、文字通り野に青色を留めぬまで、目も當てられぬ慘憺たる光景を呈するので、土民はこれを蝗災と稱して、その被害を極端に怖れてゐるのは決して無理もないことである。蝗災が酷いのは主として中南支で、北支から滿蒙の交界にかけて一帯の地方がこれに次ぐが、最近では昭和六年（一九三二年）の大旱に伴ふ副現象として、発生したものが記録的であつたと傳へられる。

三

しかし、以上の災厄にも増して破壊的なものは地震で、支那には地震は滅多に起らないかのやうに、一般に思はれてゐるらしいけれども、それを認識不足といふもの。この點に於いて、中華農商部地質調査所長翁文灝氏の、一九二二年萬國地質學會への調査報告「支那に於ける地震の影響と地質構造」[Influence seismogénique de certaines structures géologiques en china.]は、相當に纏まつた好個の参考資料と思はれるので、次にその要領を摘記して一察に供する。(東洋學藝雜誌所載早坂一郎博士譯に據る)

近來烈しい地震の起つた或る地方は、歴史上曾つて地震が頻繁であつたか、但しは激烈であつたと記されてゐる地方と好く一致してゐる。

支那では昔から日蝕や月蝕など、同様に、地震も亦注意を惹いた自然現象で、明朝以來——即ち十四世紀の後半頃から、支那の歴史に大地震や帝都に感ぜられた地震が記録されてゐるのみならず、各省縣などの地震的の歴史の内にも屢々地震の記録が現はれてゐる。清朝の時代に入れば、歴史的記録は益々完全に近き、従つて地震の地理的分布を考へる上に正確な資料を供給するに至つた。

一九一三年に出版されたトバー、ガウティエ兩氏 Tobar et Gauthier. の地震表 «Catalogue de tremblements de terresignales en Chine.»には、西曆紀元前一七六七年から紀元一八九六年までの三千六百六十年間に三千三百九十四回の地震が數へられてゐる。この外に自分は甘肅省で七十五回の地震を加へることが出来た。(甘肅地震考から)これ丈でも歴史的地震は都合三千四百六十九回となる譯である。

上海附近の徐家滙觀測所の報告には、一九〇五年——一一年迄の間に支那に起つた五十許の地震が數へられてゐる。その翌年即ち支那に共和制が宣言された年以來にも、十數回の地震が起つたが、そのうち最も破壊的なものは、中國地質調査所の觀測に係はる一九一七年と、一八年と、二〇年の

ものである。

要するに、支那には地震が可成頻繁であり、時としてまた極めて激烈であつたことが知られる。そこで、その原因を討ね、且地震に就いては支那は例外的な土地であらう、といふ従來の考へが果して眞なりや否やを究めることは、地質學に取つて大切な仕事であらう。

とて地震の地質學的研究に必要な不安定な地方の地理的分布を述べ、地震を惹き起す主要な地質構造を凡そ次の四種

(一) 垂直裂罅

(二) 陥落海岸

(三) 山脈の曲折と轉位

(四) 大規模の衝上構造

に大別し、尙附けたりとして地質構造の性質不明な地震地帯の在ることを擧げ、これら各地帯の破壊的大地震を歴史的記録に徴して次のやうに表示してゐる。

(一) 垂直裂罅

渭汾兩河の地溝帯

(概ね山西、陝西の省界に縁ひ、西南から東北に伸びて、末は長城の彼方に達するものと推せられ、略渭河の谷地と汾渭の谷地とを含む。)

年(西曆)	震央地域	摘 要	震度
(前)四六六	絳 縣	建築物動搖、死者多數	X
(紀元) 七	西安及附近都市三十五	城壁破壊二十都市死者四一五人發見	X
一七一	霍 縣	大地割れ	IX(?)
六四九	平陽(臨汾)	死者五千餘	X
七一二	太原、汾縣、絳陽	家屋破壊、死者數百	X
七五六	朝 邑	民家全滅	IX
七九三	蒲 州	黄河の肱の地方で城壁及家屋破壊	X
八六七	蒲州、平陽	家屋破壊、死者あり	IX
一〇二二	大 同	家屋破壊 土地陥落	IX
一〇三七	忻州、太原、代縣	忻州其他にて死者二萬	X
一〇七二	華 縣	小華山の局部的陥落	X(?)
一一〇二	長 治	城壁家屋崩壊死者多數	X

一二〇九	浮山	城壁及家屋殆んど崩壊死者二千乃至三千	X
一二九一	平陽	民家一萬八百破壊、死者五百	X
一三〇三	趙城、平陽、孝義	山崩れ、死者多數、役所及民家崩壊	XI
一三〇四	平陽	家屋再破壊	X
一三〇五	大同、懷仁	家屋破壊、死者二千餘、泉噴出	X
一三四二	太原	地割れ、家屋破壊	X
一三五二	山西中央部	家屋破壊、死者多數	X
一三五三	霍縣	霍山の石礫數里抛げ飛ばさる	IX(?)
一三五六	汾陽	白彪山に地割れ	IX
一四六七	大同、朔縣	死者あり	X
一四八七	屯留の西	城壁崩壊	IX
一四九七	太原、屯留	山崩れ、家屋破壊、死者千九百	X
一五〇一	胡邑、蒲州(永濟)	小舟の如き動搖瓦墜落	VIII
		破壊家屋五四八五、死者一七〇、動搖八日間	X

一五〇六	同州(朝邑附近)	鳴動あり、破壊家屋多數	X
一五四五	孝義	家屋破壊、死者多數	X
一五五五	範圍廣く、特に孝義、三原、蒲州	山西、陝西、甘肅を通じて死者八十萬、都市破壊 山崩れ地割れ等あり	XI
一五六八	西安、臨洞、高陵	城壁及家屋悉く倒壊、震動遠隔の地に及ぶ	XI
一五八〇	朔平	城壁崩壊	X
一六三八	西安、白水	破壁、塚、家屋悉く崩壊	XI
一六九五	平陽	城壁家屋破壊、死者多數、家屋は全く倒潰	XI
一八三〇	山西省(太原?)	大建築物多數破壊、死者多數、餘震頻繁	X

(最後の兩記録の間は或る政治的理由に依りて特に記録が缺けたものである。震度は Rossi-Forel に依る。)

右の表によれば、西暦七世紀以降千八百八十一年間に少くも三十二回の破壊的大地震があつたので、平均すれば三十七年毎に一回の割になる。そして震央地域として最も激烈であつたのは、次のやうな地方である。

(一) 渭、黄、汾三河の合流地方 歴史上最大のものであらうといはれる一五五五、六兩年(明の世宗三十四、五年)の地震は、この地方に起つたものであつたらしく、この地方に多くの斷層が

あることはその説明となるであらう。

(二) 平陽及其の附近(趙城、霍縣等) 霍山、羅云山等の大斷層の地方である。

(三) 忻州地方 この地方は特に一〇三八年の大地震に依つて著しく目立つ。

黄河下流域の裂罅帯

(河北、河南、山東に互る大沖積平野は、西は大行山脈により、北は南口嶺の山塊により、東は山東の山塊により、南は秦嶺山脈の東の延長によりて限られてゐる。)

太行山脈の裂罅帯

(紀元)七七七	正 定	震動三日、死者一〇〇	X
八七六	保 定	震動十五日、城壁家屋悉く破壊、死者多數、地割れ	X
一〇一一	正 定	城壁要砦破壊	X
一二八九	保 定	地盤陷落、住居屢破壊、死者數萬	X
一三二四	武安、涉縣	役所及民家破壊、死者三六七	X
一五八七	彰德、衛輝、懷慶	城壁、鐘樓及多數の家屋破壊	X
一六二四	保 定	内外の城壁破壊	X

一六三一	彰 德	家屋多數破壊、震動一ヶ月、地割れ	X
一八三〇(五月十三日)平 鄉	平 鄉	家屋多數倒壊	X
同 (五月十五日)磁 縣	磁 縣	城壁家屋悉く破壊、犠牲者數萬、震動一ケ年	XI
同 (六月十三日)修 武	武 武	家屋倒壊	IX

この地方に於ては九十六年毎に一回の大地震が起つたに過ぎない、一八三〇年の三回の地震は恐らく河北、山西、山東等に起つた大地震の反動であつたものであらう。

南口山脈の斷層帯

(紀元)二九四	涿 鹿	水噴出、死者百餘	X
一〇五八	河北各部	城壁破壊、死者數萬	XI
一三三九	懷來、延慶、順義	民家全く破壊	X
一四八四	宣化、其他	城壁破壊多數	X
一六二一	永清、安次	城壁大半倒潰、家屋悉く破壊	X
一六二四	北京附近	地震頻繁、宮殿動搖、家屋破壊せる處あり	X
一六六五	順義、安次、昌平	家屋傾斜、城壁崩壊、水迸出	IX

- 一六七九 蕪州及其附近 鳴動、家屋破壊、死者多数、地割れ、震動頻繁 IX
- 一七二〇 懷柔、密雲、其他 城壁破壊、家屋多数倒潰 X
- 一七三〇(九月三十日)北京附近 住民及兵士に救助を與ふ X
- 一八八二 同 大臣王氏辭職 IX(?)

平均百十四年毎に一回の大地震があつたことを知る。そしてその焦點は明かに斷崖地帯と懷柔の地溝に縁ふてゐる。但し一六二一年のは例外で、恐らく平野の下に隠れた震源斷層があることを示めすものであらう。

山東山塊の斷層帯

- (前)一七九 山東西部 山崩れ二十九ヶ所 X(?)
- 四六二 袁州 山嶽震動 X(?)
- 一〇六八 東平、東阿 城壁家屋破壊 X
- 一〇六九 黄河の北 同 X
- 一五〇二 濮州 家屋倒壊千餘、死者五〇 X
- 一六二二 汶上、金郷、東平 地震一日三十回餘、無比の大地震 IX

- 一六四二 蕭縣 家屋破壊 X
- 一六四三 徐州 震動反覆 VII(?)
- 一八二九(十一月五日)五河其他 破壊家屋多数 X
- 同 (十一月十九日)山東西部 鳴動十日、家屋破壊、死者數百 X
- 一八三〇(七月十四日)曹州 振動的の裂しい地震、壓死者多数 X
- 一九〇七 徐州其他 家具動揺時計停止 V
- 一九一〇 山東西部附近 恐くは泰山 VII

最初の西紀前のものを除けば、百五十二年毎に一回の大地震があつた譯である。尙山東の西部と東部とは、大體に於いて濰河の谷地と一致する大きな裂罅(リヒトホーフェン氏の所謂膠萊低地帯)によつて分たれる。この裂罅に縁ふて古來若干の記録がある。

- (前) 七〇 長落、諸城 寺院破壊、四十九縣に震動を感ず、死者六千餘 XI
- (紀元)一三四七 臨淄 震動反覆、河水動揺、城壁家屋倒壊、死者多数 X
- 一六六八 莒縣、諸城 死者二萬二千七百、山東、安徽、江蘇等に破壊、黄河大暴風雨、揚子江にて小舟轉覆、丘陵等崩壊 XI
- 一七三〇 長山 家屋破壊 X

回数こそ少いが、その激烈さは十分それを補つてゐる。最も激烈だつたのは一六六八年（清の聖祖康熙七年）のもので、これは百四十三府縣の處誌に詳記され、ドバー、ガウティエ兩氏はそれからその時代の等震線を作ることが出来た程である。これらの記録は様々であるが、しかし地震の強さや分布と好く一致するから、そんな事件が確かに有つたといふ點は疑ふ餘地がない。

雲南東部の湖水下方

（いかなる地質構造が、この地方に可成頻發する大地震の誘因となるかを決定するのは甚だ困難であるが、過去の記録と近年の觀測とによつて判斷すれば、新らしい時代の正斷層がその主因を成してゐるものらしく、その震央は裂罅の方向に沿うて散在する一連の湖水群と殆んど全く一致する。）

一四九四	曲 靖	家屋破壊、兵士住民死亡	X
一四九九	宜 良	家屋悉く倒壊、死者數萬、震動四年間	XI
一五〇〇	激 江	家屋傾斜し次第に倒壊、死者多數、震動一ヶ月	X
一五〇六	昆 明	城壁、家屋破壊、死者あり	X
一五〇七	安甯、新興、昆陽	家屋震動、死者あり	IX
一五一五	雲南東部	地割れ、役所民家破壊、死者數萬負傷これに倍す	XI

一五一七	新興、東海、河西、嶧峨	鐘樓及城壁破壊、死者あり	X
一五七一	通 海	凸字壁、役所、民家破壊、死者多數	X
一五八八	同	樹木折れ、河水動搖、民家及城壁破壊、死者あり	X
一六〇六	建 水	塔、役所、民家破壊、死者一千、震動六ヶ月	XI
一六七〇	祿 豊	城壁、民家破壊	X
一七一三	尋 甸	死者多數	X
一七五五	易 門	泉涸渴、城壁、民家破壊、死者三百	X
一七六四	江 川	死者多數	X
一七八九	通 海	民家破壊、一村湖中に埋没	X
一七九九(八月)	石 屏	死者多數、凸字壁破壊	X
一七九九(九月)	同	死傷三千	X
一八三三	東部雲南、中部路南、澧江の中間	小屋破壊八萬三四千、死者六千七百餘、震動三ヶ月、破壊再三	XI
一八五〇	巧 家	人家倒壊、死者あり	X
一八七九	彌 勒	民家、役所、城壁破壊	X
一八八二	同	城壁及多數の民家破壊	X

- 一八八七 石屏 城壁及民家大半破壊、死者二千を超ゆ
- 一九〇九 彌勒、激江間 停車場の倉庫龜裂を生じ隧道及民家破壊
- 一九一一 東川 山崩れ、家屋崩壊

右の表によれば、この地方には十七年毎に一回の大地震があつた割になる。

雲南西部の湖水地方

(地質構造は今だに不明であるが、標高二千米に達する高原の北は麗江から南は蒙化までの間に、大理の洱海を首め劍湖その他の湖水群があり、それらの位置と配列とはその成因が地殻の變動に在るべきを思はしめる。)

- 一四七四 鶴慶 震動十四回、民家破壊
- 一四九九 大理 家屋屢倒壊、死者一萬、震動四ヶ年
- 一五〇一 劍川 土壁及家屋悉く破壊
- 一五一一 鶴慶、劍川 城壁、家屋破壊、死者あり
- 一五一五 鄧川、景東 貯水池の水動揺、家屋多數破壊
- 一五二〇(三月) 蒙化 震動十日、城壁及家屋破壊、死者あり

- 一五二〇(八月) 景東 城壁、家屋倒壊、地割れ
- 一五八六 蒙化 凸字壁、役所及民家破壊、死者二十
- 一六二三 雲南縣(大理附近) 凸字壁、鐘樓及五百の民家破壊
- 一六二四 麗江 家屋倒壊
- 一六五二 蒙化 雷鳴甚だしく家屋悉く倒壊、死者三千、地割れ、運河乾涸、餘震一年
- 一六八八(四月) 鶴慶 塔、役所及多數の民家破壊、諸水動揺、震動三日
- 一六八八(五月より七月まで) 劍川 城壁、學校、役所、多數の民家破壊、死者百九十
- 一七五一 同 城壁、役所及三百の民家破壊、死者百
- 一八三九 鄧川 地割數十尺
- 一八六二 大理 城壁破壊
- 一八八一 永北 民家破壊、死者七十餘
- 一八八四 普珥 民家、役所多數破壊、死者八十餘、弱震月餘
- 一九一〇—一一 大理 震動頻繁

右によれば平均二十三年毎に一回の大地震があつたことになる。

(二) 陷落海岸

山東北東沿岸

(山東と遼東との二つの半島が相對する邊は、新らしい地質時代の陷落によつて生まれたもので、遼東側には地震は殆んど知られてゐないけれども、山東の北東岸に沿ふては古來その記録がある。)

一〇四六	登州	山崩れ、海底の雷鳴	(?)
一四〇八	同	震動二ヶ月	(?)
一五〇六	萊州	城壁破壊、餘震頻繁	X
一五四八	登州	城壁及多數の民家破壊	X
一六〇九	榮城	震動微弱、數年繼續	(?)
一六八七	蓬萊、棲霞、文登	震動月餘	(?)
一八二九	蓬萊	地割れ深さ七尺長さキロ餘、大石割る	X(?)
一九〇七	威海衛	睡眠を醒す	III
一九〇八	烟臺(芝罘)黃縣	雷鳴裂しく家屋の動搖激し	IV

この地方には破壊的大地震は少く、震央地域は北東岸に限られ、特にその中心は確かに登州また

は萊州に在ることを知る。詰まり海岸の陷落地帯に地震が起るのである。

浙江沿岸地方

この地方には、今日まで知られた歴史上の破壊的地震は極めて稀で、僅かに鎮海で一五二三年に城壁の一部と民家の若干が破壊された、といふことが記録されてゐるだけである。その理由はこの地方が政治上の中心から遠ざかつてゐたこと、地震が弱かつたことに在るであらうが、寧波には度々起つてゐる。最近では一九一三年に起り、物體が揺れ人々は睡眠から醒された。

福建沿岸地方

ちやうど地震の多い臺灣と向ひ合つた部分で、この地方の歴史的記録は次の通りである。

一〇六七	潤州、泉州、興化、龍岩、邵武	地割れ、家屋破壊	X
一二九〇	武平、泉州	死傷七千二百二十、中に大判事その他の官吏あり	XI
一四四五	漳州、龍岩	震動數日、鳥類その他の動物遁走、山崩れ民家悉く破壊、死者多數	XI
一五七四	汀州(長汀)	地割れ民家倒壊	X
一六〇〇	福州及長汀以南一帶	家屋破壊、震動數日、死者多數	X

一六〇四(七月五日)	泉州	山海鳴動、餘震頻發、地割れ	XI
同(十二月二十九日)	興化	家屋多數倒壊、動物驚怖	X
一九〇六	汕頭、臺灣、福州	三月より八月震動頻繁	(?)
一九〇七	漳州	震動、諸城門動搖	V
一九一八	汕頭、泉州間	家屋倒壊、地割れ死者その他あり	IX

十八世紀から十九世紀に互つて一見穩かになつたやうに見えるのは、記録不備の爲であらう。

海南島及雷州半島地方

(地質構造は未だ殆んど分つてゐないが、兩者の間には一の裂罅があるであらうと信ぜられる。)

海南島に二十數回の地震が算せられるが、その中には儋縣(一五二六年)、瓊東(一五二五年)、崖縣(一七二五年)などがあり、尙瓊州にも度々あつて、一六〇五年のが激しかつたと傳へられる。

(三) 山脈の曲折と轉位

(秦嶺山脈の一般的走向は大體東西であるけれども、處々に山脈の曲折や轉位があつて、これらの曲折や轉位の線の上に地震の中心がある。)

南甘肅武都に於ける曲折

(秦嶺山脈は陝西省南部では殆んど西に近い走向であるが、甘肅省の南では突然四十五度曲折して北西の走向を取り、蘭州附近を経て西寧の西に及び、そこから南山の變質岩山脈に合する。この突然の走向轉換は、地質構造上の或る種の破壊を意味するもので、そこに古來次のやうな大地震が起つたのである。)

(前) 一八六	武都	震動數日、山崩れ、死者七百六十	X
二八六	成縣	山崩れ、家屋破壊	X
六三三	西和	城壁破壊、家屋倒壊、死者三十餘	X
一六五二	階州	震動月餘、城壁、家屋破壊	X
一六七六	同	震動三月餘、城壁家屋破壊、死者多數	X
一八七九	階州、文縣	東部甘肅悉く震動、河水氾濫、山崩れ地割れ、死者階州九千八百八十一、文縣一萬八百三十	XI
一八八一	禮縣	死者四百八十	X

河南の南陽に於ける轉位

(秦嶺は伏牛山に連り、伏牛山は南々東の方向に延びてゐるが、南陽の少し東で突然南方へ轉位し

て、河南、湖北の省界の淮陽山を形成してゐる。詰まり淮陽山は、伏牛山と同じ走向を取つてゐるが、緯度一度半程南方へ轉位してゐるので、恐らく *Deochement* の結果なのであらう。南陽には一六六〇年に地震があつたといはれる丈であるが、その際は多數の家屋が倒壊した。

安徽北部霍山の曲折

(淮陽山は安徽省の北なる霍山に於いて、それまでの西北—西東南東の走向から急轉して北西—東南となる。そしてその高さを減じつゝ江蘇の北部を通過する。この霍山弧に縁ふて古來地震があつた。)

一三三六	安徽省北部		VIII(?)
一六一五	霍山	震動一ヶ月	
一六五二	安六、霍山	瓦墜落、石橋龜裂	VIII
一七六九	霍山	七、八年間に互り震動頻繁	
一八三一	霍邱	家屋倒壊	IX
一九一七	英山、霍山、六安	山崩れ、家屋倒壊、死者あり	IX

(四) 衝上構造

賀蘭山の衝上構造

(青海を出て北々東へ流れる黄河と殆んど平行して、賀蘭山の斷崖が屹立つてゐる。この山脈の頂は黄河の水面を抜くこと略二千米の高さに達してゐるが、石炭紀層が烈しく褶曲し且變質してゐる上に、謂はゆる支那層(先カムブリア系)の石灰岩の斷片が被さつて出来てゐるのである。この衝上構造を成す山脈の麓には古來地震が多く、今日も尙災害の跡を留めてゐる。)

三四九	寧夏、靈武	家屋破壊、死者十數人	IX
九九六	同	城壁家屋破壊	X
一〇一〇	靈武一帶	家屋破壊、壓死者多數	X
一三八七	寧夏	城壁倒壊	X(?)
一四七四	寧夏、靈武	城壁人家倒壊多數、震動月餘	X
一四九五	同	震動十二回、城壁人家破壊、死者あり	X
一五六二	同	城壁倒壊	X(?)
一六二七	同	二ヶ月に互り震動百回餘、城壁、塔人家悉く破壊	XI

一七〇九	中 衛	井水噴騰數尺、死者二千、震動一年、城壁八割破壊	XI
一七三八	平羅、新、寶豊、寧 夏、中衛	地盤躍上り地割れ、城壁人家堤防悉く破壊、死者五萬を超ゆ、新渠、寶豊は爾來その儘となり、中衛其他は特に大部分修復せり	XI
一八五二	中 衛	地割れ、人家倒壊、死者あり、震動月餘	X
一八八九	寧 夏	人家倒壊	IX

これによれば、平均八十六年間に一回の大地震があつたことを示めす。就中一七〇九年と一七三八年とのが破壊的で、今だに當時の廢墟を目の當り睹ることが出来る。但しこれらの都市は、いづれも山脈から數軒離れてゐるので歴史的記録を缺くが、實際には激烈であつたことが分る。

長江上流の衝上構造

(叙州より上流に於いて揚子江が大彎曲を成すあたりに重要な地震帯がある。)

(前)二五	犍 爲	山崩れ河を堰き止め河水逆流して城壁を破壊、死者三十二	X
六三八	西昌、松藩	人家破壊	IX
八一四	西 昌	一日十八回震動、死者百餘	X
一四七八	鹽 源	家屋破壊、死者多數	X

一四八〇	越 雋	一日震動七回	(?)
一五三六	西 昌	城壁人家倒壊、死者數千	X
一六〇七	合 江	人家及墓石埋没、一部免租	X
一六一〇	叙州、屏山、慶豊	城壁破壊	IX

(五) 他の震央地域

甘肅東部の涇原地方

(一九二〇年十二月十六日に起つたものは大地震の最近のもので、夕方七時頃に始まり、遠雷のやうな鳴動に伴ひ東部で破壊された家屋數十萬に及び、海原、固原、靖遠、隆德、靜寧、通渭、鎮原等の諸縣に於いて特に著しかった。それは地盤が黄土その他の若い地質から成立つてゐることに由るので、多數の土民がそこに穴居してゐた爲め死者二十萬を出したと報ぜられる。震央地域は隴山々脈に限られてゐて、それは隆德と平涼との間に聳える最高峰の名に従ひ六盤山と呼ばれる。しかし黄土層が何分厚いので地質構造は好く分らない。)

(前)一九三	隴 西	倒壊家屋四百餘	X
四七	同	山崩れ、水噴出、城壁人家破壊、死者多數	X

(紀元)五九三

陝西、甘肅	死者千餘	X
隴 西	同	X
秦 州	人家破壊、死者四千	X
固原、鎮原、慶陽	震動十日、民家役所城壁破壊、死者多數	X
蘭州の東	地割れ數十尺、國有穀物倉庫及寶物倉庫破壊	X
固原、隆德、平陽、鎮戎	民家破壊、死者一萬	XI
固 原	宮殿、役所、民家破壊、死者五千餘	XI
隴 西	動搖百餘日、山嶽位置を變じ谷埋まる、民家破壊	X
蘭州、莊浪	震動十日、城壁要砦民家破壊、死者二千餘	X
靈臺其他にて	死者多數(?)恐らく渭河の地溝に發生せしならん	X
固原、莊浪	城壁要砦破壊、死者多數	X
岷 州	寺院城壁民家大半倒壊、死者多數	X
蘭州の北東	城壁倒壊	X(?)
靜寧、隆德、鎮原	城壁、民家一萬千八百破壊、死者二千餘	X
蘭州、鞏昌	民家倒壊、死者あり	X

1110

一六五四	秦州其他	城壁役所民家殆んど全潰、死者一萬餘	XI
一六五五	安定(會寧附近)	震動數日、民家崩壊、死者あり	IX
一七一八	通渭、秦州	通渭で城壁大半破壊、死者四千餘	X
一七六五	會寧、仗羌	會寧の城壁龜裂、破壊家屋多數、仗羌で死者七百七十	X
一八八七	紅水(蘭州の北)	城壁家屋破壊	IX
一八八八	鎮 罕 堡	城壁家屋破壊、死者多數	X
一九二〇	海原、固原、會寧、靜寧、通渭	黄土大破壊、城壁家屋大破壊、死者數萬	XI

西曆五九三年以來二十二回の破壊的大地震が數へられる。平均六十五年間に一回の割合である。以上の他甘肅、陝西兩省に於ける未詳の震央地域や、揚子江の谷地に於けるもの——例へば南京、常州、鎮江等の地方にも古來微弱な地震が報ぜられ、また雲南の西部騰越の火山地方も同様である。この地方は支那で直接火山作用に歸し得る地震帯の唯一のものである。

右は翁氏の報告論文の概要であるが、われ／＼は最近に起つた三つの大地震をこゝに書き添へなければならぬ。その一つは大正十二年五月初に、我邦の諸新聞に報ぜられた、同年三月二十四日(民

國十二年、西紀一九二三年）四川奥地の打箭爐の大地震で、鱸霍、道孚兩縣を中心とする延長約十里に亘つて起つたもので、震動時間は約十分に及び、村落多数が崩壊して死傷八百餘に達したといひ、他の一つは大正十四年三月二十二日に諸新聞が報じた、雲南省西部の大理地方に起つた大地震で、大理府はこれが爲め全滅に歸したといひ、今一つは昭和十五年四月十五日の諸新聞に「香港十三日發同盟電報」として、次のやうに報じた雲南省昆明南方の大地震である。

「中華航空昆明出張所の報告によれば、去る三日拂曉から昆明南方一帯に亘り、過去百年來の大地震があつた。震動は四日も殆んど間斷なく続き、最強震は六日夜八時半に感ぜられた。これが爲め家屋の倒壊するもの多く、被害甚大の見込みで、その區域は玉溪、石屏（蒙自西北方）兩縣一帯である。」

これらの大地震がいづれも、翁氏の指摘した震央地域以外に起つたものでないことは疑ふべくもない。

四

前に述べたやうに、氣候風土には恵まれず、天災地殃が頻發する上に、四季を通じて可厭な病氣が

流行するので、いかに最負眼に看ても、支那は決して住み好い土地とはいへない。可厭な病氣にもいゝる／＼あるが、試にその主なものを挙げれば次の通りである。

アミイバ赤痢 Amoebaeal dysentery. は赤痢アミイバ *Dysenteric amoeba*. 即ちシヤウダンの謂はゆる *Entamoeba dysenteriae histolytica*, Schaudinn. の寄生によりて起る一種の風土病で、その流行の地域は麻刺利亞のそれと略一致するけれども、それより幾分北方にまで及んでゐるやうである。本症は當初から慢性的の傾向を辿るものも無論ないではないが、多くの場合は急性症から轉じて次第に慢性化するのが例で、下痢が輕快して軟便となつたかと思ふと、やがてまた血を交えた粘液を洩らすやうになり、斯くて一進一退するうち患者は次第に衰弱を増し、顔面灰黄色となり舌はすべ／＼して紅味が潮し、時として盜汗を催うしたり又浮言を發したりすることもある。攝生その宜しきを得れば幾分回復に向はぬでもないが、少し食ひ過ぎたり風を引いたりすると、また直きにぶりかへす惧れがある。アミイバ赤痢そのものは左して怖れるほどの悪疾ではないとしても、肝臟膿瘍 *Liver abscess* との合併症は、往々致命的原因となることがあるので警戒を要する。

本症は飲料水や食物から感染するのは勿論、觸接によつて感染することがあり、その他猫や犬や猿などから傳染することもあり、蠅などの昆蟲類が媒介となることもあると推せられる。

發疹瘧疾 Fleck typhus or malignant eruptive typhus (Typhus exanthematicus) は、近年まで腸瘧疾やバラ瘧疾とごつちやにされてゐたのであつたが、その後これら三者の間には本質的相異があることが分つて來た。即ち腸瘧疾 Enteric fever (英) Typhoid fever (米) (Typhus abdominalis) は、瘧疾菌 Typhus bacillus (Bacillus typhosus, Eberth) の侵蝕を受ける爲に起る熱病で、その傳染経路は主として生水や、牛乳や、牡蠣や、果物、野菜などの飲食物に由る場合が多く、蠅がその媒介に大きな役割を勤めるものと認められてゐる。次にバラ瘧疾 Paratyphoid の病原菌は、バラ瘧疾菌 Paratyphus bacillus (Bacillus paratyphosus, Achard & Bensaude) 及び ショットミューラー Schottmüller に從へば A B の兩型があり、瘧疾菌に比べると抵抗が強く、飲食物に由る傳染の危険が更に一層大いことは推定に難くない。然るに、發疹瘧疾はもとく鼠から鼠へと傳播する鼠族の疾患が、時個人體に感染する結果に他ならぬ、といつても決して誇張ではないのであつて、一九一五年にリケツチア病原體 Rickettsia prowazeki, Da Rocha-lima. の仕業であることが驗證され、今日までのところ衣虱 Bodylouse (Pediculus humanus corporis, De Geer) とケオピス鼠蚤 Cheopis' Rat flea (Xenopsylla cheopis, Rothschild) とが、その最有力な媒介者であることが確認されてゐる。

本症の特徴はこれらの媒介に由り人から人へと傳播するのではなく、その病原體が人體への感染能力を備へる爲には、患者を齧傷する衣虱と鼠蚤との體内で、先づ一定の發育經過を辿ることを前提條件とする點に存する。隨つて患者の血を吸つた衣虱や鼠蚤が、健康者を齧して新に媒介者の役目を勤める迄には、そこに多少の時日を要するので、その期間を狙つてこれらの齧蟲を退治さへすれば、人から人への接觸感染の惧れはなく、本症の流行を見ずに済む道理である。尙本症の潜伏期間と恢復期間に於ける患者の血液は、いづれも感染性を缺き、僅に本症狀が顯著に現はれてゐる短期間に於いてのみ、臨牀上、前記の媒介者が感染することであるが、それは恐らく病原體が患者の體内で比較的短時日に死滅し去る所爲かと推せられる。

本症は壯年期を過ぎた四十歳以上の患者に死亡率が多く、就中再歸熱 Febris recurrens. との合併症は殊に危険視されてゐる。因に漢方で古く傷寒 Shang-han. としてやかましく論らへられてゐたものは、前記各種の瘧疾を引包めての總稱であるらしき。

恙蟲病 Oriental river fever. は、支那では千數百年前に知られてゐたらしいが、その正體がはつきり突き止められてから、未だ辛つと十數年しか経つてゐない。漢の應劭撰する所の風俗通には「恙

は噬蟲なり。能く人心を食はす。古は草居、外くこの毒を被る。故に勞を相問ふて恙なきやと曰ふ。」とあるので、その頃には既に知られてゐたものと見らるべきであらうが、隋の巢元方の病源候論には次の通り較々具體的な記事が載つてゐる。曰く――

「山内水間有沙蟲。其蟲甚細不可見。人入水浴。及汲水澡浴。此蟲着身。及陰雨。行草間亦著人。便鑽入皮裏。其疹法初得時。皮上正赤。如小豆黍粟。以手摩赤止。痛如刺。過三日之後。令百節痛強疼。寒熱赤上發瘡。此蟲漸入至骨。則殺人。人在山澗洗浴。意拭。獲々如芒毛針刺。熟々看見處。以竹箸挑拂去之。已深者用針挑取蟲子。正如病蟲。著瓜上映光。易見行動也。挑不得。灸上三七。壯蟲死則病除。」

と。これによると、今から少くも千三百年のむかしに知られてゐたことは疑ひない。我が推古天皇の十五年（西紀六〇七年）小野妹子を隋に遣はされた際の國書に「日出處天子致書日沒處天子。無恙云々。」とあるのは、初級の中學生でも熟知する所であるが、この一事を以てしても、當時いかにこの病害に悩まされてゐたかと推せられようといふものである。

恙は蟲名である、と同時にそれに螫されて起る病名でもあつた。この蟲はケダニ族 Trombicula family. に屬する一種のケダニで、成蟲は體長一耗内外、辛うじて目に留まるくらゐの、八脚を具へ

て胴と腹との間がくびれた蜘蛛形の微蟲で、淡紅を帯びてゐるが、幼蟲のうち丸形で六脚しかなく橙紅を呈してゐる。我が國でツ、ガノムシ、ケダニ、スナダニ、カヤダニなどいひ、またアカムシともいふのはこの蟲を指したもので、アカムシとはその體色に因んだ幼蟲の俗名に他ならない。支那では今日は一般に恙 Yang. の文語を用ひず、専ら沙蟲子 Sha-shi-ya. の通名に従つてゐる。廣東新語にこれを釋いて「沙蟲。水中に生ずる所の小蟲なり。能く皮膚に入つて人を害す。患者茅根竹葉を以つてこれを刮り、或は苦苳の汁を以つてこれに塗れば愈ゆべし。」とあるのはその一例である。

長興醫學博士達の研究によると、日本産のケダニには凡そ五種あつて、そのうち温血動物や人類を襲つて病毒を傳播するものは Trombicula akamushi, (Brunpt.) であつた。而かもたゞこの一種に止まることであるが、支那産はそれとは聊かその形態を異にするものゝやうで、どうも異種に屬するのではないかと思はれる。それは兎も角として、不思議なことにはこのケダニが人類を首めいろくの温血動物に集つて、その體液（淋巴液）を吸ふ習性があるのは、アカムシと呼ばれる幼蟲の期間だけに限られ、第一期の蛹化を了してやがて成蟲となると、最早その習性を全く失つて了ふものらしい。それは恐らく、成蟲となるまでの下準備に十二分に營養を攝つて置くことが、その發育過程に必要な條件であるからであらう。

アカムシに螫されると、その部分は腫瘍となり、附近の淋巴腺は膨れ上つて疼痛を伴ひ、螫されてから四五日乃至十日前後の潜伏期を経て熱發する。その熱型は腸窒扶斯のそれに似て、稽留期には三十九度から四十度以上にも達し、幹軀と四肢とに發疹し、内臓殊に脾臓の肥大が著しく、神経系統に異常が認められる等々の全身症状が現はれ、心臓が弱つて間々死の轉機を看ることがある。死亡率は我が國では山形縣で五、六割、秋田新潟兩縣で三、四割、臺灣では一割、となつてゐて、地方的に多少の輕重があるが、豫後は極めて危篤であるとされ、今日までのところ未だ原因療法は發見されてゐない。

日本での流行地は概ね河縁ひの農村で、流行期は毎年六月から先の夏季を峠として、九、十月に及ぶことがあり、臺灣では穴勝ち河縁ひの地方に限らず、三月から十一月頃までも發生を見るやうである。この害虫はスナダニとか沙蠅とかの名が示めす通り、元來濕氣のある沙地に發生するものであるから、河の洲や、川縁の田畑や、草叢の中に立ち働く、人達にたかる場合が多いことはいふまでもなからうが、日本内地ではハタネズミ *Microtus wotkebelli* (Milne-Edwards)、また臺灣ではキクチハタネズミ *Microtus kikuchi*, Kuroda. の耳朵の内側に集つてゐたり、その他鶏、雉子、蕃鶏、三斑鶉、といった陸禽の耳殻耳朵や肉冠などにも集つてゐるさうであるから、これらの動物に接觸するのは要

慎に如くはない。

アカムシに螫されると何故發病するのか。多分微生物の仕業であらうとは推定されながらも、可也久しい間刀圭界の懸案となつてゐたものであるが、長與博士達の不斷の研究の結果、大正十四年(西紀一九二五年)に至り、漸くアカムシの細胞内に集ふ一種のリケツチア病原體 *Rickettsia orientalis*, Nagayo etc. の所爲であることが突き止められた。本症は支那には今日は最早その跡を絶つたと思はれる、と説く學者もあるやうであるが、それはチトいかゞなものであらう。

麻刺利亞は、支那では瘧の通名によつて餘程古い時代から知られてゐる風土病である。この瘧疾の氣の中つて起ると傳へられてゐる所謂瘧疾は要するに、マラリア病原體が、シナハマダラカ (*Chinese striped mosquito* (*Anopheles hyrcanus sinensis*, Wiedemann). の媒介によつて人の赤血球内に潜入し、核分裂即ち無性生殖 *Non-sexual development* (*Schizogony*), を遂げて、新に幼寄生體 *Merozoite* を形成するまでの期間を週期として、その人が惡寒發熱する一種の急性疫疾に他ならない。

シナハマダラカは、北は浦鹽から南は新嘉坡に至る地域、即ち日本、西比利沿海州、鮮滿、支那、交趾支那、馬列半嶋、泰國を含む東洋一帯に廣く分布する蚊蚊の一種で、江湖、池澤、水田、溝渠と

なく發生し、翅脈の鱗片が黒褐と黄白との斑紋を雜ゆるのと、靜止の際、口吻と頭部とは胸腹部と一直線を成して、口吻と頭部とが胸腹部と或る角度を成す他種の蚊と、一見して明瞭に區別し得られるのを特徴とする。支那の俗に花蚊子 Hua-wen-tzu、または虎蚊子 Hu-wen-tzu、と呼ぶものは則ちこれ、虎蚊子とは藪蚊、花蚊子とは斑蚊の義である。

マラリヤ病原體には

一、三日熱病原體 *Plasmodium vivax*, Grassi et Felletti.

一、四日熱病原體 *Plasmodium malariae*, Laveran.

一、熱帶熱病原體 *Plasmodium immaculatus* (*Laverania malariae*), Grassi et Felletti.

の三種がある。これらの病原體の胞子 Sporozyst. が、アノフェレス族 *Anopheles* family. の藪蚊の唾腺に集まり、潜入の機會を候ふうち、人がその藪蚊に螫されると、その傷口から忽ち潜入して赤血球中に寄生し、凡そ二段階の發育過程を経ると共に複分裂 Sporulation. を起し、かくて新に増殖した Merozoit. は、その血球の崩壊するにつれ血液中に遊離し、更に他の赤血球を侵蝕し、再び前同斷の分裂を起して増殖するのであつて、かゝる發育の過程を反覆して無性生殖を遂げる際、その寄生を受けた人即ち患者は、これらの Merozoit. が赤血球中から遊離する度毎に、惡寒戰慄、發熱倦怠を訴える

に至るのである。

胞子 Sporozyst. が赤血球を侵蝕してから、Merozoit. として血液中に遊離するまでの發育過程の循環週期は、前に述べた病原體の種類によつて各差異があり、従つてマラリア熱には次の三通りの型があることが驗證されてゐる。

一、三日熱(隔日熱) Intermittent fever.

一、四日熱 Remittent fever.

一、熱帶熱(惡性麻刺利) Malignant fever.

三日熱は隔日即ち四十八時間毎に、また四日熱は二日置き即ち七十二時間毎に發作し、熱帶熱ほど惡性ではないけれども、反覆遷延する傾向があり、熱帶熱一名惡性麻刺利は、普通毎日または隔日に發作するやうであるが、それが強ち常型といふではなく、寧ろ發作不定であつて而かもその症狀が概ね惡性である。

支那には三日熱が多く、前に述べたシナハマダラカがその媒介者として知られてゐる。左傳の疏に「瘧瘧」とあり、柳宗元の呂侍御恭慕銘に「假嶺南道節度使判官。至廣州。病瘧瘧。如瘧。」とあり、正字通によれば瘧は瘧と同じで、辭源に「俗に二日に一たび發する瘧を呼んで瘧瘧と爲す。」と見えて

ゐるから、詰まるところ痲(瘡)瘧(Kai-yao(nüeh))は三日熱を指し、また本草綱目に「老瘧、發作無時。名瘧癘。俗呼妖瘧。」 Yao-nüeh(yao.)とあるのは熱帶熱を指すものゝやうである。

マラリアは悪疾であるけれども、原因療法として規那鹽 Quinine muriate(chloride)といふ特效薬があるので大きに助かる譯である。

住血吸蟲症

Filarisis. も亦蚊の媒介によつて起る風土病で、支那には相當に多く、厦門に於いては住民の一〇パーセント、また交趾支那に於いては同じく三〇パーセントが冒かされた記録を示めてゐるさうである。といふのは畢竟、彼等が蚊の驅逐に無頓着な所爲で、取別け下層社會と來ては、炎暑の候室内の温氣に堪えず、輒もすれば好んで戸外に露臥して就眠する蠻習があるからであらうと推せられる。

本症は絲狀蟲族 family "Filaridae." に屬するバンクロフト住血吸蟲が、媒介者の唾液と共に人體内に潜入し、その血管や淋巴管や淋巴腺などに寄生し、頗る異常の繁殖を遂げること原因するもので、その幼蟲は晝間は人體の比較的深處の血管内に潜入してゐるけれども、夜間になると皮下の血管に出て來るので、蚊に吸はれて更に他の人體に傳播される惧れがある。試にこれを詳しく説けば、こ

の住血吸蟲の幼蟲 *Filaria sanguinis hominis*. は、直接宿主たる人體の細胞内に在つては、著しい發育を遂げることはないが、一たび中間宿主たる蚊に吸收せられると、こゝに始めて十二分に發育し、その蚊が更に新たな宿主たる人體の皮膚を刺すに及んで、忽ちその組織内に侵入し、盛んに成長して成蟲 *Wuchereria (Filaria) bancrofti*, (Cobbold) となり、疾患を起さしめるのであつて、蚊が媒介者として重要な役割を勤めてゐる譯である。

その蚊は一はアカイヘカまたはアカマダラカ House mosquito (*Culex pipiens pallens*) Coquillett. であり、他はリウキウシマカ Large White-banded mosquito (*Aedes argenteus*, Poiret=Stegomyia fasciata, Wiedmann) である。前者は日本、朝鮮、滿洲、支那に見る所の普通の蚊で、後者は全世界の熱帯、亞熱帯に互り最も廣く分布する大形の蚊で、胸背に二條の黄白縦線が通り、その兩側に銀白の彎曲線があるのを特徴とする。いづれも夜間に活動する種類で、後者はかの怖るべき黄熱病 Yellow jack or fever (*Febris helvus*) の傳播者としても名高し。

カラ・アザール病 Kala Azar disease (*Leishmaniasis Kala-azar*) は、レイシヌマニア病原體の寄生によつて發する傳染性風土病で、今日までのところ、南京蟲と刺蝶蠅とがその有力な媒介者に擬せ

られてゐる。

レイシユマニア病原體にもいろいろあるが、カラアザールのそれは *Leishmania Donovanii* (Mesnil et Laveran). とし幅一、五乃至二、〇ミクロン、長さ二、五乃至三、五ミクロンの梨子形をした微細な原生蟲で、これが南京蟲や刺蝶蠅の刺蝥によつて人體内に潜入すると、忽ち脾臓、肝臓、血管、骨髓などの中に寄生して疾患を起さしめる。

南京蟲は支那名を壁蝨子 *Pei-shih-tzu* とも、牀蝨子 *Chuang-shih-tzu* とも、臭蝨子 *Chou* (Hsion)-*shih-tzu* とも、臭蝨 (*hou-chung*) とも、或は單に蝨子 *Chung-tzu* ともしふ誰もが周知の蝨蟲で世界到る處に發見される。また刺蝶蠅は支那名を白蛉兒 *Pai-ling-erh* と呼び、槐花 *Acacia* が藤のやうな白い長房を垂れて咲く頃から發生し、梅雨期にかけて夥しく繁殖する蚋子や糠蚊に近い蝨蟲で、滿洲や北支那では低氣壓の通過に伴れて、風下へくと無數に襲來するので、土民の間に怖れられてゐることは前に述べた通りである。しかし以上二種の昆蟲は、カラ・アザール媒介の嫌疑が濃厚であるといふに止まつて、遺憾ながらまだ病原傳播の確認を得るまでに至つてゐない。

カラ・アザール *Kala-Azar* としふのは、印度の土民がそれに罹かると、たゞさへ煤けたやうな皮膚の色合が、氣味の悪いほどドス黒くなつて來るところから、さう呼び慣はすに至つたとのことで、

黒い皮膚の義であるさうである。本症の特徴は浮腫殊に脾肝の肥大と、進行性の貧血と、不規則の熱型とで、その慢性に來るものは患者がそれと氣注いた時は病が已に膏盲に入つた時で、手遅れの恐れがあるばかりでなく、動もすれば合併症を伴ひ易く、その急性のものは高熱と下痢と貧血とによつて衰弱の極み、忽ち死の轉機を見ることが少なく、その比率は七〇—九〇パーセントにも達し、尙會つてベンガル州だけで一ヶ年に百萬の患者を出し、而かもその九八パーセントが鬼藉に入つた例すらある、と傳へられてゐる。ロジャー・ムーア *Roger Moore* 氏達の研究により、特效藥として五價のアンチモンを用ひるやうになつてから、死亡率が餘程低下して來たとはいふものゝ、それでも支那を首め、印度、中央亞細亞、南露士亞、地中海沿岸、亞弗利加などの流行地には、未だ相當の猖獗振りを見せてゐるので、怖るべき惡疾であることに變りはない。

回歸熱 *Relapsing fever* (*Febris recurrens*) は、スピロヘタ病原體 (*Spirochaeta Obermeyerii*)、

の寄生によつて起る傳染性風土病で、衣蝨がその傳播者として認められてゐるが、その外にも媒介をする蝨蟲がありそうに想へる。

本症は五日から七日くらゐの潜伏期間を経て後、概ね何んの先觸れもなく突如惡寒戰慄を伴つて三

十九、四十度以上の高熱を發し、數日の休歇期を置いては更に同様の發作を繰り返すこと三四回に及ぶのが特徴で、その反覆回数を重ねる度毎に休歇期間が長くなるのと反對に、發作期間は短くなり、頭痛、腰痛、脾腫、肝腫、黃疸、脈搏結滯、倦怠虚脱などの諸症状は軽くなるのであるが、患者の疲労衰弱は倍加三倍加して、遂に斃れることが多い。危険なのは肺炎や腎臓などの合併症で、中にも發疹空扶斯とのそれは死亡率が最も高いといはれてゐる。

出血黃疸症 Weil's disease (Spirochaetosis ictero haemorrhagica). は、スプロヘータ病原體 (Leptospira ictero-haemorrhagiae). が、鼠の媒介によつて人體内に寄生する結果起る傳染性風土病で、稽留高熱と全身黃疸と胃腸粘膜炎出血とをその特徴とする。即ち五七日稀に十數日の潜伏期を置き、いきなり惡寒戰慄に引續き發熱して三十九度から四十度以上に達し、先づ胃腸傷害を以つて始まり、全身黃疸これに次ぎ、三四日乃至十數日の高熱持續後、その症状極めて著しく、間々消化器の粘膜炎出血を來たすことが珍らしくない。

かうした全身黃疸且粘膜炎出血の特徴は、稽留に次ぐ下熱の前後に見る症状であつて、患者の體力が發病後二週間くらゐ持ち耐へ得れば、最早峠を越した譯で、それからは漸次恢復に向ふとされてゐる

が死亡率三〇—四八パーセントを示めず相當の惡疾である。

脾脫疽 Splenic fever (Febris anthracis). は、脾脫疽菌 (Bacillus anthracis, Pollender). の寄生によつて發する急性傳染病で、元來家畜就中牛馬の疾患が、偶々人體に傳播される結果に他ならない。言ひ換へれば、その疾患に罹つた牛馬の鼻汁や唾液や屍骸などに觸れるとか、死肉を食ふとかして胃かされるので、詰まり接觸傳染である。その経路は、皮膚、鼻口及消化器の粘膜炎で、皮膚からするものは、全身感染を見ぬ限り、死の轉機を免れることがないが、芽胞の吸入により肺を胃かされた場合は、炎症を起して二三日のうちに心臟衰弱で斃れ、また死肉や病畜の乳汁を飲食して腸を胃かされた場合は、中毒を起して一二日で忽ち仲びて了ふ。而かもそれは到底側で視てゐられないほどの狂ひ死にとつた状態で、英語の Splenic apoplexy. と呼ばれるのは道理こそ、と領付かれる世にも怖るべき惡疫である。

癩病 Leprosy. は、我邦でも今だに天刑病と稱して、血統によるものゝやうに思ひ込んでゐる向もあるらしいけれども、矢張り癩桿菌 (Bacillus leprae, Hansen.) と云ふ結核菌に酷肖した一種の細菌

の寄生による傳染病であることは、一八七二年ハンセン氏の發見するところで、結節癩 *Lepra tuberosa* と、麻痺癩 *Lepra maculo-anaesthetica* と、兩者の混合癩 *Lepra mixta* とがあり、患者若しくは保菌者の鼻液や、唾液や、喀痰や、膿汁や、血液などによる接觸傳染であるのは贅するまでもな

5。
論語に「伯牛疾あり。子之を問ふ。牖より其の手を執りて曰く、之を亡ふは命なるかな。斯の人に於て斯の疾あり。斯の人に於て斯の疾あり。」とあり、また史記の曹相國世家に「時に尙平陽公主、子の襄を生む。癘を病みて國に歸る。」とあるのは、いづれもこの癩を指したものであらうと推せられてゐる。

支那では閩粵地方即ち福建、廣東兩省に癩患者が多く、都鄙となく街頭に物を乞ふ姿を屢見受けることである。辭源に「麻瘋 *Limfang*、閩廣所特有之病。古亦謂之癩。」「癩 *Lai*、本作癩。惡疾也。即麻瘋。」とあり、大楓子油が特效ありとして古くから漢方に知られてゐる。大楓子油 *Ta-fen-tzu-yu* とは金縷梅科にする常綠喬木タイフウシ *Hydnocarpus anhelimintica*, *Pierra* の子核から搾つた油で、南支那、印度支那、暹羅などに産する。

ペスト症 *Black Plague or Pest* は、光緒二十年(西紀一八九四年)香港に於ける流行の際、我が北里博士とイヤシン *Yersin* 氏よつて發見せられたペスト桿菌 (*Bacillus pestis bubonicae*) の寄生によつて起る傳染性風土病で、ケオプスネズミノシ *Cheopsis'* Rat Flea (*Xenopsylla cheopsis*, *Rothschild*) がその媒介者であることは餘りにも周知の事實である。

本症は支那名を鼠疫 *Chu-ti* とし、核子癩 *Ho (hu)-tzu-wen* とし、痒子癩 *Yang-tzu-wen* とし、南支那は世界の五病原地——

- 一、ヒマラヤ山脉の東方雲南地方
- 一、ヒマラヤ山脉の西南クマオン地方
- 一、アルタイ山地よりキルギス高原に互る地方
- 一、アラビヤ及ナイル上流ウガンダ地方
- 一、南米ブラジル地方

の二に數へられる雲南地方と近接の土地柄に、屢その流行を看することは怪しむを要せぬであらう。

痘瘡 *Small Pox* は、元來牛痘が偶人體に感染する結果起る疫疾であること丈は分つてゐるが、今

だにその病原體を突き止めるまでに至つてゐない。

本症は支那名を俗に天花 *Tien-hua*. と呼び、自然の放牧地たる蒙(古)、(新)疆、(西)藏と接壤する關係上、可也古い時代から支那民族の間に知られ、牛痘の痂皮を人の鼻腔へ挿んで置くと、豫防の効があるといふ事實に基いて、一種の免疫法をも胡地から傳へてゐたものらしく、西紀一七九八年英人 Edward Jenner. の種痘法 *Inoculation*. の發明に先立つのは勿論、同じく一七一三年希臘人 *Immanuel Timoni*. の報告に見える希臘法よりも、更に古いやうに思はれるが、惜しいかな現行法の域にまで達するには至らなかつた。

漢民族が胡地から傳へた一種の免疫法といふのは、毎春牛痘の流行時期にその膿漿を採り、これに或る乾材(植物性芳香料?)を混じて一年間壺に藏し、その毒性を弱めた後、これを種苗として布片に移して鼻腔に栓をし、または小刀で鼻腔を傷け、その創口にこれを植を付けるのださうで、蒙古の喇嘛僧はその傳授を受ける爲め、遙々西藏へ修行がてら出向くといふことである。今日の種痘法に比べると、いかにも原始的で相當亂暴なやうでもあるが、しかしその原理に至つては全く軌を一にするものであることは疑ふべくもない。けれども、この古法ですら喇嘛教徒以外には普及してゐない状態で、土民の間に毎年極まつて猖獗を來たすのは、誰もが周知の事實である。

住血吸蟲症

Oriental blood-fluke disease. は、我が俗に片山病とも山梨病ともいはれ、明治三十七年(西紀一九〇四年)桂田博士の發見命名に係はる日本住血吸蟲 (*Schistosomum japonica*, *Katsurada*. の寄生によつて起る重患で、赤痢様の下痢症狀、肝脾の肥大、浮腫、貧血、肺及腦症などを特徴とし、豫後は概して不良であつて原因療法はないとされてゐる。

我邦では宮入貝一名片山貝と呼ぶ一種小型の淡水産巻貝 *Katayama nospohora*, *Robson*. がその中間宿主とされてゐるが、支那では揚子江を首め大小の江河に饑産する別種の巻貝 *Oncemelania Schmackeri*. が中間宿主と認められてゐる。

本症はその幼蟲が人の皮膚を穿通して、専ら肝臓や腸管壁に寄生することにより感染するので、その幼蟲 *Cercaria*. は紐狀の尾を揮つて自在に水中を游泳してゐようといふものであるから、うつかりそこらの河にも入れないわけである。

肺チストマ症

Lung fluke disease (Paragonimiasis pulmonis). は、肺臓チストマ *Lung fluke (Paragonimus westermani, Kerbert)*. の寄生によつて發するもので、咳嗽、發熱、咯血などを特徴とし、時に癲癇様の腦症を起すことがある。

この病原蟲の第一中間宿主は、淡水産の巻貝カハニナ *Thiara liberina*, Gould. で、第二中間宿主は支那ではシナモクヅカニ (土名毛蜞 *Mao-chi*), *Eriocher sinensis*, Milne-Edwards). をその一に數ふべく、その外にも尙幾許かあるであらう。肺臟デストマは巢元方病原に九蟲の一として、

「肺蟲 *Fei-ch'ung*, 狀如蠶。令三人咳嗽成勞殺一人」

とあり、少くも隋代から知られてゐたものゝやうで、支那人の間にこの病原蟲の寄生による咯血症 *Parasiticae haemophytosis*. に悩むものが相當に多いのは、彼等が好物の蟹類を炙熟または煤熟することなしに、妄に飽食する所爲であらうと推せられる。ひとり毛蜞に限らず、總じて蟹類は鹽漬、糟漬、醬油漬として、彼等の尤も嗜好する所であるが、肺蛭の幼蟲は相當永い期間に亙りこれらの中に生存し得るであらうから、危険の上もないとせなければならぬ。

肝臟デストマ症 *Liverf luke disease*. は、筧形吸蟲 *Liver fluke* (*Clonorchis sinensis*, Cobbold). の

寄生によるもので、時として脾臟にも潜入することがあり、貧血、肝腫、疲弱、氣力沮喪などを特徴とし、間々神經症狀を呈することがある。

この病原蟲は矢張り前記の巢元方病原に九蟲の一として

「弱蟲。一名膈蟲。狀如瓜瓣。令三人多唾。」

とあり、形瓜實に似て黄褐色を帯び、心脾の間に寄生するから、それで膈蟲とも稱するものらしい。肺臟デストマと同じく、支那では古い時代から知られてゐるやうで、この痼疾には相當に悩まされたと看える。その第一中間宿主は、我邦ではマメタニシ *Bithynia striata*, Benson. で、第二中間宿主はフナ、モロコ、ヒガイ、ヤリタナゴ、タナゴ、ゼニタナゴ、アブラハヤ、ムギツクなどの淡水魚であるといはれてゐるが、支那では恐らく第一宿主は丸味があつて螺刻のないマルマメタニシ *Bulinus fuchsiana*, Moellendorff. (揚子江その他南支那の淡水産)、第二宿主としては少くも

1、鯽魚 *Chi-yü* (鮪魚 *Pu-yü*) *Cyprinus auratus*, L.

1、黃鰱魚 *Huang-ku-yü* (*Leuciscus waleckii*, Dybowski. L. *chuancheicus*, Kessler. L. *waleckii sinensis*, Rendahl. etc).

などに指を屈すべきであらう。土民はこれら魚類の食用に注意を拂はぬ所爲か、本症の患者は可也多 *san*。

尙叙上の外、支那が赤痢菌 *Bacillus dysenteriae*. による赤痢病、コレラ孤菌 *Vibrio cholerae asi-*

ticæ. による虎列刺病、病原不明の猩紅熱の scarlatina. などの流行地で、毎年猖獗を極めることは餘りにも知れ渡つた所である。その他肺炎 Pneumonia. 肺癆 Phthisis. 沿岸地方のアラビヤ象皮病 Elephantiasis arabum. 等々、一々枚舉に違がなし。

説き來つてこゝに至り、われ／＼は今更ながら、自然の脅威のいかに執拗而かも残酷であるかを察すべく、かくて生命財産の安固に對し、殆んど何等の保障だに與へられてゐない支那民族が、不知不識の間に諦めの觀念を植ゑつけられるやうになつたことは、寧ろ必然の歸趨でなければならぬ。

民族性及民族精神

日本民族と支那民族とは同文同種である、といふ説が一時盛んに唱へられたことがあるが、今だにさう思ひ込んでゐる向もないではないらしい。しかし、凡そこれくらゐ認識不足の甚だしいものはない。尤も單に皮膚や毛髮の色合によつて白哲人種と黄色人種、また居住の地域によつて歐羅巴人種と亞細亞人種、といつた至つて大雑把な觀方をすれば、日支兩民族はいかさま同種であるといはれぬこともないであらう。けれども、今時は已うそんな不合理な觀方をするものはなく、人種別は身長や、頭形や、鼻形などの體質を標準とした、綿密な統計による研究の結果を綜合して後始めて決定さるべきであつて、人類學上、日本民族が

一、アイヌ族 Ainu family.

一、ツングース族 Tungu-ic family.

一、漢(華夏)族

一、インドネシア(マレイ・ポリネシア族) Indonesian (Malay-polinesian) family.

- 一、モング・クメール族 (Meng-Khmer family).
- 一、ドラヴィダ族 Dravidian family.
- 一、ネグリット族 Negrito family.

などの混血人種であるのに對し、支那民族は

- 一、漢(華夏)族
- 一、ツングース族 Tungusic family.
- 一、蒙古族 Mongolian family.
- 一、西戎族 Hsi-jung-family.
- 一、羌族 (H'iang family).
- 一、暹(泰族) Shan (Thai) family.
- 一、モング・クメール(蒙克) Meng-Khmer family.
- 一、西藏緬甸族 Tib.-Burmese family.
- 一、ネグリット族 Negrito family.

などの混血人種で、決して同種とは認め難し。

尙参考の爲め支那の新進學者李濟氏が、身長や頭形や鼻形の指數に基き、各省別に調査を遂げた結果を示せば次の通りである。

- 河北省 (朝鮮族) 西戎族、ツングース族、蒙古族、モング・クメール族
- 山東省 ツングース族、蒙古族
- 山西省 西戎族、ツングース族、蒙古族、モング・クメール族
- 陝西省 羌族、西戎族、ツングース族、蒙古族、モング・クメール族
- 甘肅省 羌族、西戎族、ツングース族、蒙古族
- 河南省 ツングース族、蒙古族、モング・クメール族
- 安徽省 ツングース族、蒙古族、(矮小種族)
- 江蘇省 暹(泰)族、モング・クメール族
- 浙江省 暹(泰)族、モング・クメール族、ツングース族、蒙古族
- 福建省 暹(泰)族、モング・クメール族
- 湖北省 暹(泰)族、モング・クメール族、ツングース族、蒙古族
- 湖南省 モング・クメール族、蒙古族
- 江西省 暹(泰)族、モング・クメール族、蒙古族
- 廣東省 暹(泰)族、モング・クメール族、蒙古族
- 廣西省 暹(泰)族、モング・クメール族、蒙古族

貴州省 モング・クメール族、西藏緬甸族、蒙古族
 四川省 譚(泰)族、モング・クメール族、西藏緬甸族、蒙古族
 雲南省 譚(泰)族、モング・クメール族、西藏緬甸族、蒙古族、ネグリット族

次に、日本の文字は改めて説くまでもなく、漢字と假名の併用であるが、その漢字は單に語音や語意を寫すのに假りて來たまであり、また假名は語文字としての漢字を素として發明されたとはいふものゝ、今日では立派に音符文字として進化してゐるのであつて、象形文字から語文字にまで發達したツ限り、爾後の進化を示めてゐない漢字とは、全くその本質を異にすることを先づ以つて指摘しなければならぬ。更に指摘すべきは口語や文語の構造で、日本語が朝鮮語、滿洲語、蒙古語、サモエード Samoyede 語、マシヤル Magyar 語、フィン Fin. 語、ラブ Lapp 語など、同じく烏拉爾阿爾泰 Ural-Altaï. 語系に屬するのに反して、支那語が暹羅、安南、交趾支那などの諸族語と共に、世界獨歩の位置を占める語系に屬してゐるのは、本質的な第二の相異點といふべく、同文どころの談では斷じてないのである。

否、寧ろ日本民族と支那民族とは異文異種であり、衣食住を首めとして、風俗、習慣、人情の微に至るまで可也に違つてゐる。支那の家屋は、その構造といひ、材料といひ、間取りの具合といひ、どう見ても、日本の家屋よりは却つて西洋のそれに似通つた點が多い、支那家は室の入口がドア式の開き戸になつてゐて、日本家のやうな引き戸ではなく、各室毎に壁で仕切られてゐて、決して襖や障子を用ひない。さうして支那人は西洋人と同じやうに靴を穿いたまゝ室内へ出入りをし、椅子に腰を掛けて食事をし、寢臺に寝ね、われ／＼日本人のやうに疊の上に臥起きをしたり、食事をしたりすることはない。

食物は何んでも彼んでも一應脂でイタメなければ承知が出来ない、といつた鹽梅で飽くまで濃厚好みな點に於いて、支那食は寧ろ西洋食に近く、あつさりした日本食とは凡そ對蹠的であることは周知の通りであるが、それよりも更に本質的な相異は、日本食が材料独自の持味を成るべく損ぜずそのまま賞美する建前なのに反して、支那食はいろ／＼な材料を取り合せた調味を賞美するのを建前とする點で、その結果は勢ひ前者は見掛けほど嘗くなく、後者は見掛けによらず嘗いといふことにもなり、随つて日本食は視覺本位の眼で食ふ料理で、支那食は味覺本位の舌で味ふ料理、との評があるのも穴勝ち故なしとしない。

衣服も、見て呉れや着心地は二の次ぎとして、専ら起居動作に重きを措いた點に於いて、支那服は日本服よりも反つて西洋服に似寄つてゐる。支那人は西洋人と同じやうに足に靴を穿き、頭に帽を戴

き、お互に禮を交はすにも決して帽を取らず。靴を脱ぐのは寝る時丈で、わが國俗のやうに家に入
りする度毎に、一々履物を脱いだり穿いたりすることはない。

支那人は労働者の末に至るまで人前に素肌——といふうちにも取別け素足を露はすことを極端に嫌
ふ癖がある。彼等は實に能く喋べる。延べつ幕なしに喋べりつゞける。さうして盛んに手振り身振り
を用ひる。彼等は誠意や親切氣の有無は別として、概ね愛嬌たつぷりでお世辭好く、決して人を外ら
せない。等々々。一々數へ立てれば際限もないが、それほどにまあ彼等はいづれかといへば西洋人に
似通つた方で、われ／＼日本人とは丸切り變つた性格の持主なのである。

x

x

x

x

x

x

「民は猶沙の如し。たゞ搏つてこれを聚むるのみ。」——これは明の太祖とその謀臣劉基伯温との問
答録である、焼餅歌（月餅歌又の名帝師問答）の中に見える伯温の警句として知られてゐる。彼に従
へば堯舜の民は漆を以つて沙を搏つが如く、三代の民は膠を以つて沙を搏つが如くであつたのに引換
へ、霸世の民は水を以つて沙を搏つが如きものであるから、聚民の術としては是非とも儒學を講ずる必
要がある、といふに歸する。

それは兎も角も「民は猶沙の如し。」とは好く言つたもので、支那人の性格を悉くして妙を得てゐる
と思ふ。沙はサラ／＼してゐて粘り氣がなく、バラ／＼で一つに固まらぬのを特徴とするが、素窠と
していかにも潤ひがないのが彼等の生活であり、手ん手區々で中心がないのが彼等の社會である。一
家子その本來の割據性のゆゑに著しく孤立的であるやうに、その延長でしかない社會も亦、その通
りで、そこには渴仰の對象となるべき宗教の權威もなければ、さりとして奉仕の對象となるべき道德の
中心もなく、附加雷同はあつても、和合團結の理念としては更に見出さるべくもない。黄沙は透滲性に
富んでゐても、凝集力に乏しいとされてゐるが、縦に繋がり合ふ丈で、横の結び着きがない支那人の
社會生活は、喩えて看れば沙も沙、ちやうど謂はゆる中原を被ふ黄沙のやうなものである。

支那人は家族主義者として知られてゐるが、他人は一切引當にならぬ社會に在つて、攻めてもの頼
りは血を分けた肉親の外には有り得ないであらうから、それは一應も二應も尤も千萬な次第である。
彼等が時享と稱して、例へば劉姓は劉氏の宗家に、李姓は李氏の宗家に一家子打揃つて、それ／＼遠
祖の祭祀を絶やさぬ舊慣があるのは周知の通りで、血縁の繋がり合ひが存外根強いことは今更贅す
までもないが、それといふのも畢竟、かくして結成された勢力を背景に、銘々の利益を擁護し増進せ
うとするに過ぎぬのであつて、これをしも骨肉和合の美はしい現はれと見るのは大きな僻目である。

支那人の家族生活は生活の全體であつて、家族生活以外に生活はなく、家族道德は道德の全體であつて、家族道德以外に道德はなく、而かも彼等の生活——従つて道德はどこまでも個人を基礎とした生存本能以外の何物でもないのである。それは彼等の指導理念と目せられる儒學や、道教の説くところが結局、個人の保身術乃至處世法に終始して、それより一步たりとも踏み出したものでなく、古から汗牛充棟も嘗ならぬ幾多の經典が畢竟、それらの金言集に過ぎぬ一事を以てしても、容易に領付かれることである。

われ／＼がこの世に出生して、家庭に成長し社會に活動する所以のものは、斷じて賣名や營利や享樂の爲ではない。進んでは環境に、退いては自我に打克つべく戦ひ抜くうち、自ら鍛鍊陶冶さるべき人格の渾成に在るのであつて、國家生活は實にこの目的に副ふべき最高道德でなければならぬ。ところで、支那には生憎とさうした最高道德がなく、その社會は腐敗しその家庭は紊亂してゐるので、人格の鍛鍊陶冶に必須の精神生活は所詮、望まんとして望まらるべくもないのである。

その結果として、支那民族が平和の假裝裡に只様物質生活の追求を是れ事とするに至つたことは、敢へて怪しむを要せぬであらう。それがよしやいかばかり虚飾と僞囁とに充たされた内容空疎なものであるにもせよ、彼等がそれで自己陶醉に浸つてゐる以上、兎角の詮議は無用の沙汰である。支那人

にもでつぷり肥えた太り肉と、細つそりした瘦形との二通りがあるやうであるが、どちらも押並べて、彼等から受ける第一印象は無表情そのもので、そこに冴え／＼しい明朗さもなければ、些の森嚴味もないことであり、第二印象は側の見も氣の毒なほど無氣力なことである。

彼等の無表情は諦めの觀念に捉はれた運命論者に相應しい相好であり、無氣力は自然の脅威に對する忍従主義の影響であるには相違ない。が、しかしその所爲とばかり見るのは僻目で、物質生活の追求に精力の消耗を來たした結果であることも、決して看落してはならない。それは何より先づ彼等のどろんとした眼光を一目視れば直に分ること、その所爲か顔に緊りがなく、いかにもおつとりしてゐて、悪く言へば何處か間が抜けてゐるやうに思へる。

支那人が煙鬼といはれるほどの阿片亡者であること、人前では大平に酔ふほど呑みも仕まいが、生來の酒好きとあつて、内緒では隨分行ける口であること、それにも輪を掛けて女と來たら眼がない方であることなどは、知る人ぞ知る所であるが、さうした耽溺生活の上から言つても、日常の食物に並々ならぬ苦心を拂つて、保命養生にあくせくするのは蓋し理の當然でがなあらう。既述の通り、支那の醫學が畢竟保命養生と、これに基く一種の食餌療法とを本領とし、速くも周代に食醫の制があつて、飲食の事を管掌せしめた程であるが、それは補精壯陽と稱して、今日の營養を主眼とするものに他な

らないと斷言しても、敢へて大過ないであらう。ことほど左様に、彼等は幾千年のむかしから耽溺主義者であつた譯であるが、同時にまた物質生活の追求は、その當然の歸結として、彼等を世にも類ひ稀れなる食道樂たらしめた事である。

孔子がその非凡な耽溺性格なるにも拘はらず、その遺經には餘り食事に涉つた記載が見當らぬやうであるが、亞聖の孟子になると、例へば――

「膾炙與羊棗孰美。」

とか、或はまた

「魚我所欲也。熊掌亦我所欲也。二者不可得兼。舍魚而取熊掌者也。」

とかあつて、ちよい／＼それが見えてゐるので、梁の惠王に對へて「是以君子遠庖厨也。」などゝ口前では言つてゐても、夫子自身存外なものであつたかも知れない。因に、熊掌 Hsiung-chang は魚翅 Yü-chih. (フカの鰭) 燕窩 Yen-wa. (コアマツバメの巢) などゝ共に、支那料理では今だに上膳十六碗の一に數へられてゐる。降つて蘇東坡あたりと來ると、道樂どころか大通として聞えてゐる丈に

惠崇春江晚景

竹外桃花三兩枝。春江水暖鴨先知。

萋萋滿地蘆芽短。正是河豚欲上時。

とばかり口占んで、蠱酸を涌かしてゐるうちは可かつたが、たうとう河豚中毒で死に損ねたこともあ
るくらゐな相當の者。といひたいが、竹坡詩話に

東坡性嗜猪。在黃岡時。戲作云。

黃州好猪肉。價賤等糞土。

富者不肯喫。貧者不識煮。

慢著火。少著水。

火候足時他自美。

と看えて、實は大分と意地の汚い方であつたらしい。さすれば常人の食ひ辛棒は言はずもがなであら
う。

支那人が鼻の下を可愛がる上に、色氣に執念く、お負けに賭博に凝り性であることは世間周知の事
實である。京津政界の巨頭連が某處に會合して日夜密談中、との速耳を入れて詳細を探つて見れば何
んのこと、數百萬元をかけての大賭博の開帳中、と知れて新聞特派員も流石に頭を搔いた、といふ嘘
のやうな話は軍閥華かなりし頃の内幕であるが、術の違ひこそあれ、そこらの張三李四が數奇な道に

はまり込むのに不思議はあるまい。けれども彼等がいかに頑強そのものゝやうな體格の持主であらうとも、これでは何んで耐らう。富者は金に飽かし、貧者は身上を潰してまでも、例へば

虎 精 虎骨を煮詰めた膏膠を用ゆる。

鹿 鞭 鹿の陰莖を乾材としたもの。

鱗蛇膽 ニシキヘビの膽

蟾 酥 ヒキガヘル眉間の白汁。

六神丸 俗に人膽として知らる。カンフル注射より幾百倍の効果があるといふ。原料不詳。

九龍蟲 ゴミムシダマシ *Alphitobius* を十種の藥草にて飼ひ、生のまゝ嚙下する。

人 蔘 テウセンニンジンの根部。

何首烏 ツルドクダミの根部。

麝 香 ジャカウシカの陰囊の分泌液。

靈猫香 ジャカウネコの陰囊の分泌液。

龍涎香 マツカウクジラの膽囊結石？

沉香 伽藍 *Aquilaria* の心材。

鬱金香 サフランの花粉。

樟 腦 *Camphor*. ($C_{10}H_{16}O$)

龍 腦 *Borneol*. ($C_{10}H_{18}O$)

桂 油 桂の樹脂 *Cassia oil*.

花蛇酒 白花蛇(ヒヤツボダ、シロスチシマヘビ)酒、黒花蛇(サラサヘビ)酒の別がある。

枸杞酒 クコの實を混じて醸す。

五加皮酒 ウコギの樹皮を混じて醸す。

煙 土 阿片 *Opium*.

モルヒネ *Morphine*. ($C_{17}H_{19}NO_3$)

コカイン *Cocain*. ($C_{17}H_{21}NO_4$)

等々々、漢方や洋方の興奮劑や、強壯劑や、麻酔劑などをあれやこれやと撰擇して、常用するのは誰もが知る通りであるが、これは概ね補精壯陽を旨とする謂はゆる媚藥の類に他ならない。が、これらの媚藥を何んぼ浴びるほど用ひたところで、俗にいふ何んとか呑んで首絞る喩ではないが、生身の體軀はどうなつたものではなく、揚句の果ては癌腫に悩むか、腎虚を患ふか、左もなければ癮者となる

くらゐが落ちで、彼等が上下を通じて一般に動作不活潑を極めて、看るからに活氣に乏しい容貌をしてゐるのは、決して故なしとせぬであらう。見掛け丈はどつしりした大人風や勿體らしい長者風も、實は案外なもので滅多矢鱈と感心せぬことである。

彼等の物質生活は、やがて彼等の平和主義であり、文化主義であり、利己主義でなければならぬ。物質の充足により能ふ丈け生活を豊富ならしめることが、彼等の文化主義であり、黄金の蓄積によりその目的を達成せんとするところに、彼等の利己主義があり、そしてそれは安穩無事の過程に於いて始めて期待さるべき事柄である。それゆゑに、平和主義といひ文化主義といひ利己主義といふも、詮する所は物質生活が産む必然の歸結でなくして何んであらう。

世人結_レ交須_レ黄金。黄金不_レ多交不_レ深。

縱令然諾暫相許。終是悠々行路心。

と唐の張謂は歌つたが、文選に「富貴なれば他人も合し、貧賤なれば親戚すら離る。」とあるのも畢竟、一にこれ有るが爲である。黄金を巡つて離合集散し、自己の利害打算から進退去就する彼等の社會が、いかばかり道義全く地を拂つて人倫を無視したものであるかは、多くの辯を費すまでもあるまい。支那人が平和の禮讀者であり、極端な非戰論者であるのは今更のことではないが、それは戦争が

飽くなき犠牲を強要し、有らゆる慘禍を齎らす以外の何物でもない、とする彼等一流の利害打算から割出された結果でもあらうけれど、抑も亦尙文卑武の觀念に由来することは否み難いであらう。

一口に文野といふが、文は斷るまでもなく文明開化を意味し、野は野蠻蒙昧を意味する。支那は自ら中華と號して文明の中心であり、支那人だけが唯一の開化民である、と窃に矜誇した。また文武といつて、古から尙文卑武の俗を成した。彼等に從へば、武は暴力であり破壊であり殺伐であつて、疑ひもなく文明開化の仇敵として、極力回避さるべき野蠻蒙昧の行爲に他ならなかつたのである。文武兼備とか文事ある者は必ず武備ありとかの語は有るには有るけれども、大體に於いて斯く斷言して毫も差支ないと思ふ。それ故にまた文武百官といつて、武弁よりも文人を重用した。かの刎頸の交で名高い蔣相如が上卿としてその位廉頗の右に在つたのは、必ずしも頗の攻城野戰の功よりか、相如の口舌の勞を高く評價した丈の理由からではなく、その他、漢の高祖がその功臣を封するに當り、歴戰の武將達を差置いて經理の才に富む蕭何に獨り食邑を多く賜はつたといひ、蜀の劉備が孔明を三たび草廬の中に顧みて、桃園以來の盟友たる關羽、張飛の上位に迎えたといひ、同様の事例は尙決して少しとしない。それには武人を餘り重用し過ぎて、飛んでもない野心を起されては？といふ政略上の考慮なども當然含まれてゐたであらうけれど、それにしてからが崇文抑武の現はれであることは動かぬ所

である。

その結果として文恬武黷の弊に陥り、社會一般が不知不識の間に懦弱の氣風に染まつたのは、是非もない次第であるが、しかし他方に於いて粗野殺伐を嫌つて風流韻事を嗜み、優雅典麗を好む傾嚮があるのは、一應彼等の美點と認むべきであらう。大人の敬稱は能く這間の消息を穿つてゐる。彼等が相手の尊稱に極まつて大人と呼ぶのを慣例とすることは周知の通りであるが、彼等は大人と崇められるのを無上の矜誇とし、看方によつては、彼等の畢生の努力は大人としての地位と格式と體面とを、いかにして保持するかの一事に傾注されてゐるといつて可い。大人の二字は恐らく彼等の理想で、彼等はそれに異常の憧憬を持つとしか思へないものがある。文雅の極致は即ち大人の境地でなければならぬ。われ／＼はかうした大人風や長者振りを、或る程度まで美點として認めるに吝かなものではないけれども、さりとしてそれをさも／＼奥床しい限りであるかに持て囃すのは實はいかゞなもので、彼等の大人趣味は生來事物に淡泊で質素簡朴を理念とする、われ／＼の國民性とは凡そしつくり反りの合ひさうもない。何は兎もあれ、支那生活はわれ／＼の眼には餘りにも故意とらしくて、何處か知ら不自然の嫌があり、永い間には一種の臭味が鼻に着いて、我慢にも辛抱し切れなくなり勝ちであるが、さうまで仕なければ物足らぬらしいところに、彼等の民族性の一端があり／＼と讀まれるのである。

る。

支那人は周代の古から非常な玉石好きで通つてゐる。玉には軟硬の別があつて、硬玉は角閃石の類で、硬度六乃至七、謂はゆる翡翠はこれに屬し、軟玉は輝石の類で、硬度はそれより五分方低く、單に玉と名けるものはこれに屬する。翡翠は素より結構、光を裏んで心持ちうるんだ玉もちよいと粹なものではあるが、さりとして器物から装具まで何も彼も翡翠づくめ、玉づくめではチトうんざりせざるを得ない。それと同じ道理で、衝立は點蒼石(大理石 雲南)か錦石(大理石 廣東)、硯材は端溪石(廣東)、歙溪石(安徽)、澄泥石(山西)、紅絲石(山東)、印材は花乳石(河南)、壽山石(福建)、芙蓉石(同上)、昌化石(浙江)、青田石(同上)、田黃(一名凍石 福建浙江)、とかうどうも型に嵌まつて了つては根つから面白味も湧かない。また彼等の香料好きは可いとして、素馨花や茉莉花のけどいのを紅茶に入れたりするのは、茶の折角の香を消すやうなもので、麝香を内服して體中ぶん／＼させるなどは、却つて心なき業ではない。

彼等は殊の外の生物好きで、その飼育に頗る妙を得てゐることは周知の通りである。で、場末の飯棚子や田舎の草房子までが、鳥籠の一つ蟲籠の一つも弔してゐるとか。剃頭舗などで顧客へのお愛想に吵子を着けた小禽を放し飼ひにしておくとか、或はまた徂く春の日永や秋日和など、そこらの樹

蔭に三五人、銘々秘藏の飼鳥を持ち寄り、思ひ／＼に卓を取圍んで茶を啜り、其を吹かしながら、ひねもす心ゆくばかり鳴き交はす音色に聞き戀れるとか。いつたやうな至つて暢んびりした和やかな光景に出會すと、誰人しもいかさま床しいナと感ずるであらうけれど、さて他方、鶴鶉や闘魚(朝鮮金魚)や趨々兒(こぼろ)などの闘争性を利用して、その勝負に賭事をして楽しむ、打つて變つた場面によつた日には、折角受けた最初の印象も忽ち何處ぞへ吹き飛んで了ふであらう。

趨々兒、金琵琶(鈴蟲) 馬鈴子(松蟲) 金鐘兒(青松蟲) 金鈴子(邯鄲) 木鈴子(熊涼蟲) 油葫蘆(マダラス)などの鳴蟲は、苦瓠(くわ)を壺形にした中を泥で塗り潰した特別の容器に飼ひ、それを暖かい處へ置いて冬の最中までもその鳴く音を楽しむのであるが、その容器なども息抜き(き抜き)の孔の口を翡翠で念入りに細工した蓋をするなど、蟲入れにはチト勿體ないほど奢れたものであるが、さうして飼つた蟲を更(せんはり)に小葫蘆に移して懐に忍ばせ、その鳴く音を聴きつゝ、主客相對して夜を徹し鳥鶯を闘はす、といふに至つては好事を通り越して邪道に入つたものといはなければならぬ。

支那趣味は支那料理が濃厚でしつこいやうに、何分共にくど過ぎる嫌ひなしとしない。しかし彼等は何處までもくどいが上にくどくすることが、彼等の生活を豊富にする所以である、と勘違ひしてひたすら自己陶醉に浸つてゐるものゝやうである。われ／＼は環境に逆ひ自我を没して、偏に國家生活

の向上發展の爲に戦ひに戦ひ抜き斃れて後已むとき、始めて永劫の生命を享くるを得るのであつて、そこに眞の平和があり、慰安があり、福祉があると信じて疑はぬものであるが、それを飽くまで未來に求めずして現世に求め、靈魂に求めずして肉體に求め、精神に求めずして物質に求むべく、日夜孜孜として倦む所を知らないのが支那民族であつて、隨つて彼等の生活がその外觀に似もやらず、存外内容に乏しく、豊富のやうでその實空疎であり、潤澤さうで根つから索寞を免かれぬ所以である。

支那人が享樂的で娑婆氣の莫迦に多いことは、前にもちよいと觸れて置いた所であるが、さうかと思へばまた、その反對に浮世放れがした逃避的な點も看過し得ない。ちよいと考へると、この二つの傾向はいかにも對蹠的であり、従つて彼等は互に相矛盾する性格の持主らしくもあるが、よく／＼突止めると決してさうではない。彼等は環境の奴隷であり、運命の奴隷であり、鬼神の奴隷である。彼等は環境に逆つて自己の運命を切り拓く丈の意識的努力を欠いでをり、萬難を排して當初の目的を貫くほどの克己的精神に乏しい。彼等は何事も勢ひ已むを得ぬといふのを口實に構へて、鬼神の支配に對し極めて柔順である。それが一方に於いて現實的な享樂氣分ともなれば、また他方に於いて厭世的の逃避性ともなるのである。彼等とても無論反撥心が皆無な譯はない。けれども、それは本能的衝動の結果に過ぎぬゆゑ、何分永續きがせず、直に尻古垂れて何事も天なり命なりとばかり、自然の成行

に任かして了う。どうかなるだらうと高を括つてゐるうちは、彼等は非常な樂天家であるが、さてどうにもならなくなつて來ると、やがてまた極端な悲觀者に速變りする。逃避性といひ享樂氣分といひ狀、歸する所は一つである。

自分は前項に於いて、聖仙二者の人格を通して支那民族性の兩端を叩くべく、儒道二教の哲學の中にその社會相の兩面を求むべく、詮するところ天命説に基く薩滿思想の産物に外ならぬことを述べて置いたが、茲にも繰返し指摘して再應の注目を喚起したいのは、彼等の氣持を短的に言ひ悉くして餘蘊のない慣用語の沒法子である。誰しも生まれ故郷に愛着を持たぬものはなく、郷土愛は恐らく人間自然の發露であらうけれど、支那人は取分け一段と強い方であることは、それを題材とした名吟が古來少からぬのを見ても知れようといふもので、苛酷な官僚の鞭に脅えながらも、あくまで生まれ故郷にへばり着いて、いつかな離れまいとする彼等の心事は好く讀める。が、それにしては左ばかり強い郷土愛に燃える彼等として、何んぞ些の未練氣もなく住み慣れた墳墓の地を後にして、遠く海外へ出稼するのを別段苦にする容子もなく、世界到る處にその足跡を印せざるはない状態であるのか。一圓合點の行かぬことのやうにも思はれるけれども、彼等にして看れば、あくまで郷土に踏み止まるのも沒法子であれば、斷然海外へ移住するのも亦均しく沒法子で、すべては環境次第であり、運命の儘で

あり、鬼神任かせであつて、そこに何んの變哲もない譯である。

かく言へば、有らゆる氣候風土に耐え、困苦缺乏を忍んで、勤儉力行、孜々として是れ日も晝ならぬ、彼等の辛抱振りや根氣好さを指摘して、叙上の所説を反駁する向もあらう。いかさま一應尤もなことで、何人も敢へてさうした彼等の長所を認めぬものはあるまいが、たゞしかし、それは何分彼等が沒法子と感じた場合の辛抱振りや根氣好さに止まり、更に進んで鬼神を驅逐し環境を克服して運命を開拓する、働き掛けの場合に於ける肝腎の頑張振りや粘り強さと來ては、生憎とその割合でないことを知らなければならぬ。

戦争などにはさうした民族性が好く表はれてゐる。彼等は衆を恃んで無闇と強がるが、身方が寡いとなるとカラ意氣地がない。そこでむかしから旗鼓堂々といつて、敵身方共旗印を成るべく多く飾り立て、鳴物入りで囃しに囃して盛んに氣聲を揚げ虚勢を張り、いかにも大兵であるかに看せ掛ける。すると遠近風を望んで我れ勝ちに旗色の好きそうな方へ加擔するので、一戦を交えるに及ばずして勝敗立ちどころに決することも決して珍らしくない。今日でも成るべく實戦を避けて、専ら宣傳と買収とに力癩を入れたがるのはその所爲で、聲討とはさすがに巧く言つたものであるが、これなどは支那でなければ見られぬ所である。それは兎に角として、支那の軍隊が内戦と外戦とに論なく、専ら防

禦に際して相當頑強な抵抗を示めず拘はらず、徒に兵力の優劣比較に捉はれ過ぎて攻撃精神を缺き、戰術的成算の絶無な場合たりとも猶且つ肉弾突撃を敢行する、といった氣魄に乏しいことは掩ふべくもない。たゞ一つこゝに例外とも看做さるべきは、彼等が切端詰まつて最早免かれぬ破目と觀念した場合で、さうなると、窮鼠反つて猫を噬むの譬で、ヤケに糞度胸を据えて日頃に似氣ない勇猛振りを發揮することがある。古來名將と諺はれる程のものは、その邊の呼吸を篤と吞込んだもので、漢楚の戰に韓信が「これを死地に陥れて而して後に生かし、これを亡地に置いて而して後に存す」といつて背水の戰を布き、また諸葛孔明が敵を圍むに際して、故意と一方丈け兵を手薄にして置き、城將がそこから脱け出して落ちてゆくのを、途中に待伏せて難なく討ち取る、といった常套の手段に出るなどは、その好い例である。

鬼神の奴隸——環境の奴隸——運命の奴隸は、同時に感情の奴隸である。彼等には冷靜な理性の判斷に基く自制心もなければ克己心もなく、たゞ一時の感情に支配されるまゝに輕舉妄動に出て憚らず、流言蜚語に蠱惑されて附加雷同を敢へてして怪しまない。一時流行した何々運動と名が附くものは、概ねこの類で、雄辯に彼等の雷同性を物語つてゐる。彼等が感情に對する盲従は、同時に彼等の極端性を示めすものに他ならない。曾つては閨房に幽閉の生活を送つて、社會とは全然没交渉であつた妙

齡の婦人が、今日は謂はゆる新らしい女性として、公衆の面前に金切聲を振り立て、政談演説を試み、或は青年男子と伍して各種の運動に參じ、窃に以つて得々然たるなど、餘りにも激しい變り方に一驚を喫するくらゐであるが、よく考へて見れば別に仔細はない。革命以來、彼等が一度に羈絆を斷つて自由の社會に突放された結果、心中堅く把持する何物もない輩が、謹慎と節制とを失つて只様氣隨氣儘に流れたに過ぎない。

支那人が保守的であつて容易に舊態を改めない性分であることは、今更らしく説くまでもあるまいが、さうかと思へばまた事と次第によつては隨分、新奇を趁うて移り易はる傾向もないではない。そこで、彼等はひよつとしたら互に相反する二つの法則の支配を受けるものではないか、と疑ふ向きもある。しかしながら彼等が保守的なのは取りも直さず、彼等に適應性がない所爲であり、他方時に突飛な言動を敢てして一見意外の感なきを得ざらしめるものは、彼等の感傷的な所爲であつて、強ちさうとばかりも斷ぜられない。理性の衡器に掛けて冷靜な判斷を下し得ぬものゝ行爲が、間々極端から極端に走せて第三者をして目を側立てしめることがあるのは、敢へて異とするに足らぬであらう。彼等は折に觸れ事に激して一たび亢奮すれば、意氣衝天、水火だに辭せざる概がある。さうしてその極み往々脱線して、日常到底成し得ぬと思ふやうな事でも平氣で仕出來すが、やがて平靜に復へれば忽

ちまた意氣銷沈して、後悔の臍を嘔み悲痛に堪えぬ容子をする。そこで元來和易淡泊な邦人などは、苦もなくその術に乗つて直に瞞される。けれども、それは何も彼等が心底から改悛して、翻然反省した結果に出たものではないから、又そろ同様の事を繰返して平然としてゐる。その状態はさながら夢遊病者のそれに似て、自己の言動に對して丸切り記憶がないかに見える。彼等に非常な働きをさせるには、激烈な檄文を撒くか、左もなくば演舌するかして、たゞ極度の亢奮を與へさへすれば可い。

彼等は文章に巧みであると同様に演舌にも妙を得てゐる。手振り身振りよろしくあつて、さて語調に乗つて來ると、口頭泡を飛ばして慷慨宇宙を呑むの概がある、かと思へば悲憤感極まつて聲涙俱に下り、自らその場に堪えぬやうな状を示めし、第三者をして前後果して同一人なるやを訝らしめるほどである。が、聴衆はいつかそれに釣ひ込まれて共に泣き共に憤り、果ては催眠者に看るやうに、その示唆のまゝに不知不識雪崩を打つて、どつとばかり場外指して繰り出す。煽動家はその呼吸を好く呑み込んでゐて、彼等を野心の道具に使ふのを忘れない。百姓一揆や政治運動はかくして起る。

彼等は演説に於いて一身の使ひ分けをする、と同じやうに起居動作共に表裏反覆殆んど常なく、イヤに尊大に構へてゐるかと思へば、無闇と卑屈になり、一見極めて大膽なやうであつて、その實内心頗る臆病で責任を恐れ、強者に對しては追従是れ事とする癖に、一旦相手が弱いと看れば忽ち打つて

變つて倨傲の態度に出る、といつた鹽梅で、物に喩へれば何んのことはない、押さへつけければ凹み、その手を放せばまた元通りに返つて膨らむゴム球のやうなものである。彼等が大自然の不斷の脅威に對して、いかに畏怖し、屈伏し、萎縮しつゝあるかは周知の通りであるが、人間はさうはゆかない。そこに治者の悩みがあり、歴代の朝廷一つとして手を焼かぬはなかつた。

支那人は家庭で好い加減揉まれた上、社會に出てからもさんぐ揉んで、揉み抜かれてゐる所爲か、好く言へば交際上手、世渡り上手、悪く言へば擦れ枯らしで、到底一筋縄にゆく民族ではない。彼等の性格は極めて複雑で、われ／＼邦人のやうな單純、卒直、潔癖な一本調子のお人好しとは大分に違ふ。彼等は人前を憚り世間體を取繕ふのに吸々とした見榮坊であり、體裁家であつて、ちよいとやそつとでは却々その肚の底まで呑み込めない。諺にも「一人不_レ入_レ廟。二人不_レ窺_レ井。」とあつて、彼等は怖ろしく猜疑心が深いばかりでなく、陰險、狡獪、譎訴、偏見、妬視、殘忍……であつて、もしや二重人格の持主では？と思ふくらゐのもの。記傳や稗史小説の類はその反映に他ならない。

これを要するに、支那の民族性及民族精神は、いづれの角度から觀てもその餘り高級でない生活と文化との表徴でないものはなく、趣味と思想との舊態依然として中世紀的な支那民族は、謂はゆる自然人と大した變りはないので、現代人を以つて彼等を目すべくそこに多大の隔りが有ることは掩ふ由

もない。彼等は自ら描く權威の束縛に甘んじて、進んで眞理を窮めようとするでもなければ、退いて信仰に生きようとするでもなく、久しきに渉る官僚專制と農業封鎖とは、彼等の性情をしていよ／＼ますます／＼黙忍、盲従、沒我に傾かしめ、勇往邁進、身を挺して難を排するといふ潑刺たる氣魄なきに至らしめずにはおかなかつた。彼等の道徳は徹頭徹尾受け身の道徳に終始して、働き掛けの道徳としては爪の垢ほども持合せてゐない。彼等は一般に苟且偷安、踏阻逡巡の弊風に狎れて、時間と規律との觀念もなければ正義と節制との精神もなく、彼等の間にはいかな人格も毎に多數の勢力に壓せられて敬意を拂はれず。彼等の形式主義は事物を一定の鑄型に箝め込まねば納得せぬばかりでなく、揚句の果ては彼等自身までも、いつか同じ鑄型に陥まり切つて二進も三進もゆかぬ始末。老邦よ、何處へゆく！

(了)

昭和十六年五月九日印刷
昭和十六年五月十二日發行

僕の支那觀

定價 金貳圓

著者 村 田

懋 鷹

發行者 大 庭

吉 良

印刷者

田中印刷合名會社

代表者 田中 正
東京市荒川區日暮里町八ノ二五

發行所 大 日 社

東京市神田區司町一ノ一〇
電話 神田 七九三番
振替東京 五四八二五番

904
275

終

